

4-22 ☆石川康宏氏は、唯物史観を認識の中心に据えるべきではないのか

——石川康宏氏の唯物史観を欠落させた資本主義発展論について——

石川先生のマルクス・エンゲルス・レーニンの歪曲と唯物史観を欠いた資本主義発展論を批判する(『経済』No232 2015年1月号掲載論文に関して)

〈目次〉

I 石川康宏氏のエンゲルスとレーニンの思考への幾つかの正しくない言及について

① 国家独占資本主義を「資本主義の最後の段階」とよんだということについて(P20-21)

①a 石川康宏氏がまとめた「レーニンの議論のあらまし」には、レーニンの思想が反映されていない

①b 私が説明してきたレーニンの認識のなにが問題なのか

② 「全般的危機」論の克服と帝国主義論の発展にかんして(P22~23)

ここまでが、HP4-22-1「☆石川康宏氏は、唯物史観を認識の中心に据えるべきではないのか(その1)」の内容です。

③ 独占と計画性について(P20、25、26)のトンチンカンな独り相撲

④ 「最後の段階」規定が先にあり、「独占」段階論は後になって発見したという、レーニンの人格をゼロに低める暴論(P27)

⑤ エンゲルスは「生産の無政府性」を資本主義の矛盾と捉えたという(P28-29)

⑥ レーニンはエンゲルスの「資本主義」論に依拠したから誤ったという(P28-29)

⑦ マルクスの資本主義発展論について(P34~35)

⑦a マルクスの資本主義論とエンゲルスの資本主義論とは違うという

⑦b 石川先生は「資本家」なのか、「労働貴族」なのか、「不破さんの小判鮫」なのか

⑦c マルクスの資本主義発展論について

II 資本主義の発展・成熟度をとらえる基準とは

① 石川先生は、「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」が資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度だと「直感」でいう。

② それでは、これから資本主義はどのように発展するのか

②a 世界はどうか

②b 日本はどうか

②c 資本主義から社会主義への発展をどのように準備するのか

III 絶望的な感想

* PDF ファイルの引用文中で丸ゴシック・青色で表示されている文字は全集等で異字体で表記されているものです。〈目次〉のカッコ内の文字は『経済』No232のページです。

石川先生の「論文」を取り上げた理由

石川康宏氏の『経済』2015年1月号の「資本主義の発展段階を考える」という「論文」は、レーニンを意図的に「引用」しつつ、マルクス・エンゲルスの時代の「恐慌、やレーニンの時代の「帝国主義、のもつ特別な意味を無視して、自らの「資本主義の発展段階」についての「直感」が「マルクスの資本主義論」に近いというもので、不破さんの「資本主義観」に沿った「論文」です。

石川先生はレーニンの著作から、不可欠な論旨を除外したり、「言葉」を断片的に取りだし、前後を逆にしたりして、自分の独自の解釈ができるように繋ぎ合わせ、「プロクルストゥスの寝台」のように、レーニンを、無理矢理、自らの「レーニン像」の型にはめようとして、レーニンの足を自分のベットに合わせるように、レーニンの豊かな思想を石川先生の都合のいいように切断してしまいます。

私たちが或る思想家から学んだり、その思想家を乗り越えたりして、理論を発展させようとするとき、その人が何を言っているのかを正確につかみ、それが事実を反映したものであるかどうかを明らかにすることは、研究の態度として、最も大切な出発点の一つです。そのような最低限の条件を満たさない——不可欠な論旨を除外したり、「言葉」を断片的に取りだし、前後を逆にしたりして、自分の独自の解釈ができるように繋ぎ合わせて引用された——石川先生の本を書いた文章をもとに引用された人の思想を復元することは不可能なことです。

そのような事情の結果、私の、石川先生の「論文」内容の検討事項が、①レーニンの言っていることは何か、そしてそれは正しいのかということ、原典を引用して説明すること、それを踏まえて②石川先生の主張の誤りを証明することの二つの作業を必要とするものとなり、みなさんにとっても大変わかりづらい、面倒なものとなりました。

しかし、この「論文」の批判がいかにやりがいのない、面倒な作業であるにしても、私がこの作業に取りかかったのは、『経済』読者のみなさんに、①この文章から受けるレーニンに対する誤った認識を払拭するため、レーニンが何を言い、それが当時の時代の中で正しい認識だったのか、それとも誤りだったのかを、レーニンの著作にもとづき、あきらかにすること、②石川康宏氏の「資本主義の発展段階」のとらえ方がいかに科学的社会主義の思想からかけ離れたものであるかをあきらかにすること、そのことが、科学的社会主義の思想を確信するものの義務であると思ったからです。そして、この「論文」を取り上げることとしたもう一つの理由は、この「論文」が不破哲三氏の謬論に依拠しているところが多くあり、不破さんの謬論に依拠するとどうなるかの一つのサンプルとしての意味を持つと思ったからです。

I 石川康宏氏のエンゲルスとレーニンの思考への幾つかの正しくない言及について

①国家独占資本主義を「資本主義の最後の段階」とよんだということに関して(P20-21)

②石川康宏氏がまとめた「レーニンの議論のあらまし」には、レーニンの思想が反映されていない

石川先生は、『経済』の P20~21 で、レーニンの資本主義の発展段階論として、(1)から(5)に分けて「レーニンの議論のあらまし」を述べています。

(1)では、レーニンがした「帝国主義」の「定義」について、(2)では、レーニンが「帝国主義」を「死滅しつつある資本主義」と理由が述べられ、だんだん「レーニンの議論のあらまし」の本題に入っていきますが、ここまでの私のコメントは省略させていただきます。

石川先生は、(3)として、レーニンの「立論」が「エンゲルスの議論を継承したもの」であるとして、自分の論旨に沿うような印象を与える「言葉」をピックアップして並べ立

てで、レーニンとエンゲルスが同じことを言っているように思わせようとしています。

不破哲三氏とそのお友だちたちにとって、マルクスの理論を必死で防衛することに人生の大半を捧げたエンゲルスは、「誤り」の塊ですから、レーニンがエンゲルスと同じ考えだというレッテルを貼ることが重要なのです。

ここでは、マルクスやエンゲルスやレーニンが言っていることが正しいかどうか判断基準ではありません。だから石川先生の「引用文」でレーニンが言っていることが正しいのか、正しくないのか、などということは問題ではないのです。レーニンとエンゲルスが同じことを言っていると思わせるだけで十分なのです。

しかし、私たちは、まずはじめに、(3)で石川先生が「抜粋」した文章で、レーニンは何を訴えようとしたのか、見ることにしましょう。

レーニンはこの演説で何を言っているのか、見てみましょう。

石川先生が「編集」したこの文章は、『現在の情勢についての決議』の決議案を擁護するレーニンの演説の一部で、その「第一部」に関わるものです。レーニンはこの演説で何を言っているのか、見てみましょう。

「第一部」は当時の世界資本主義経済の諸条件を特徴づけたもので、レーニンは「資本の集積と国際化は、巨大な成長をとげている。独占資本主義は国家独占資本主義に移行しつつあり、情勢の圧力のもとに、生産と分配にたいする社会的統制が幾多の国で実施されており、その一部の国では、全般的な労働義務制にうつりつつある」ことを述べています。

そして、先生が引用した P21 上段四行目の文と文の間には、「戦時国家——国家独占資本主義の存在する現在では、このことを指摘することはいっそう適切である。計画性の導入は、労働者を奴隷の状態からすくいだすものではなく、」という文章があり、「戦時国家——国家独占資本主義」の本質を曝露しています。レーニンは、この中で、資本主義のもとでの「計画性の導入」が「労働者を奴隷の状態からすくいだすものではなく、資本家がいっそう『計画的に』利潤を手に入れるようになる」ものであることを、エンゲルスを引用して説明し、計画性が国家独占資本主義によって、トラストよりも「いっそう高度の計画的形態へと成長転化しつつある」ことを説明しました。

この認識のどこに事実認識の誤りがあるのでしょうか。

レーニンがエンゲルスと同じ考えだというレッテルを貼るために、『現在の情勢についての決議』の決議案を擁護するレーニンの演説の文章の断片を継ぎ合わせ、あたかもどこかに誤りがあるかのように読者をミスリードするのは、少しばかり品性が欠けているのではないのでしょうか。

ついでに申し上げますと、この決議案には「ヨーロッパのもっともおくれた国の一つで、小農民的住民大衆のあいだで活動しているロシアのプロレタリアートは、社会主義的改造の即時の実現を目標とすることはできない」と、日本共産党綱領の手本となる民主主義革命から社会主義革命への道すじが示されており、「以上の諸方策を実施するにあたっては、なみなみならぬ慎重さと細心さをもって行動し、住民の安定した多数者を獲得し、あれこれの方策が実践的に機が熟しているというこの多数者の自覚した確信をかちえることが必要」であると「住民の安定した多数者を獲得」することの必要性を述べています。これが、不破さんの言う「レーニンのあれた時期」にレーニンの指導する党が、活発な議論を通じ

て、練り上げた決議案です。

石川先生は、ある時代の特徴まで、レーニンのせいにするのか

石川先生は、次に(4)で、『戦争と革命』と『国家と革命』の中の「言葉」を抜粋して、あたかも「アイデア」が発展するかのように「言葉」をならべて、「これによって帝国主義は、独占資本主義の時代から『独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代』に発展する時代になったとされたのです」と、レーニンが神に代わって歴史をでっち上げたかのように文章を結んでいます。

私たちの検証のルールに従って、レーニンの原典を確認してみましょう。

最初の、「全集 第24巻 429ページ」として抜粋されている文章は、1917年5月14日(27日)のレーニンの講演の内容が『プラウダ』に『戦争と革命』として掲載されたものの一部です。この中でレーニンは、今日の戦争が「最大の資本主義的巨人」の二つのグループ(一方がイギリスとフランスを主とするグループでもう一方がドイツを中心とするグループ)の経済競争から不可避免的に導かれることを述べ、イギリスとフランスを主とするグループの説明をしたあと、ドイツを中心とするグループについて、このグループが「資本主義的生産の発展の新しいやり方」、「資本主義の巨大な力と国家の巨大な力とを単一の機構に結合するという原理」をもちこんだことを述べています。

これを石川先生は「議論」と言っていますが、これは「議論」でも何でもなく、事実を正しく述べたものです。

続いて、石川先生は、(4)の結びとして、「これによって帝国主義は、独占資本主義の時代から『独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代』に発展する時代になった(全集 第25巻 442-3ページ)とされたのです」と、今度は『国家と革命』の「言葉」をツギハギします。

読者のみなさんの理解をたすけるためにこの部分——「独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代」という言葉——が、どんな文脈の中で、どのような文章の一部として出てきたのかを見てみたいと思います。

『国家と革命』で、レーニンはまず、一九世紀末と二十世紀初頭の先進諸国の歴史を概観して、共和国でも君主国でも、「議会権力」が完成され、ブルジョア政党や小ブルジョア政党が官吏の地位という「獲物」の配分を巡って権力闘争を行うなかで、「執行権力」とその官僚的および軍事的機関がいっそう完全なものになり強化したこと、そしてこれが、資本主義国家一般の最近の進化全体の一般的な特徴であることを述べます。続いて、「だがとくに帝国主義——銀行資本の時代、巨大な資本主義的独占体の時代、**独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代**——は、君主制の国々でも、もっと自由な共和制の国々でも、プロレタリアートにたいする弾圧の強化と関連して、『国家機構』の異常な強化、国家機構の官僚的および軍事的機関の前代未聞の拡大をしめしている」と、当時の「帝国主義」を曝露して、国家機構の官僚的および軍事的機関を「破壊する」ためにプロレタリア革命の「力をことごとく集中」する必要がますます高まっていることを述べています。

石川先生が結びに使った「言葉」はこの文章の中の**ゴシック**で示した部分です。

このように、レーニンは『国家と革命』で「事実」に基づいて、当時の「帝国主義」の特徴の一つとして「独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代」と述べたのであって、仮説を立てたり、「アイデア」の発展を論証したりしたのではありません。当時の

この認識のどこに誤りがあるのでしょうか。なぜ、論文の主旨を正しく伝えようともせず、「とされたのです」などと言うのでしょうか！？ 先生には歴史の発展の中で物事をみるという視点はないのでしょうか。

「とされたのです」などと言って、読者をミスリードすることが科学的社会主義の理論を発展させようと真剣に考えている人のやることなのでしょうか。

(4)のおまけ。レーニンの洞察力の凄さ。

レーニンは石川先生が取り上げた 1917 年 5 月 14 日の講演のなかで、アメリカの「未来の対日戦争の準備」について次のように述べており、その洞察力の凄さに驚かされます。以下がその部分です。ぜひご一読して下さい。

「アメリカの参戦については、私はつぎのように言おう。人々は、アメリカには民主主義があり、そこにはホワイト・ハウスがあるということを引合いにだしている。だが、奴隷制がたおれたのは半世紀まえのことであった。奴隷解放戦争は 1865 年におわった。そして、それ以来、そこでは億万長者が成長した。彼らは、その金融でアメリカ全体をにぎりしめており、メキシコの圧殺を準備しており、また不可避免的に、太平洋の分割をめぐる日本と戦争するようになるだろう。この戦争は、すでに幾十年ものあいだ準備されている。あらゆる文献が、そのことをものがたっている。そこで、アメリカの参戦の真の目的は、未来の対日戦争の準備である。とはいえ、アメリカの人民は、やはりかなり大きな自由をもっているので、彼らが、なにか侵略的な目的のための、たとえば日本との闘いのための強制的な兵役義務や軍隊の創設をあまんじて受けいれるとは、ちょっと考えられない。アメリカ人にはヨーロッパの実例で、これがどういうことになるか、わかっている。そこで、アメリカの資本家にとっては、弱小民族の権利をまもる闘いという崇高な理想のかげにかくれて、強大な常備軍を創設する口実をえるために、この戦争に介入することが必要になったのである。」(第 24 巻 『戦争と革命』 P444)

そして、おまけの続きとして、レーニンは、1920 年 12 月 6 日のロシア共産党(ボ)モスクワ組織の活動分子の会合での演説で、将来の日米戦争が避けられないことを、次のように述べていますので、これも是非ご一読下さい。

「こんにちの資本主義世界には、利用すべき根本的対立があるであろうか？ 三つの基本的な対立がある。私はそれをあげてみよう。第一の、われわれにもっとも近い対立——それは、日本とアメリカの関係である。両者のあいだには戦争が準備されている。両者は、その海岸が 3000 ヴェルスタもへだたっているとはいえ、太平洋の両岸で平和的に共存することができない。この競争が彼らの資本主義の関係から生じてくることは、争う余地がない。将来の日米戦争という問題をあつかった膨大な文献がある。戦争が準備されつつあること、それが避けられないということ、このことには疑いの余地はない。平和主義者はこの問題を回避し、きまり文句でそれを塗りつぶそうとつとめているが、経済的諸関係と外交の歴史を研究しているすべてのものには、戦争が経済的に成熟しており、政治的に準備されつつあることは、一点の疑いもありえない。この問題をあつかったどの本をとってみても、戦争が成熟したことを見ないわけにはいかない。地球は分割済みである。日本は、膨大な面積の植民地を奪取した。日本は 5000 万人の人口を擁し、しかも経済的には比較的弱い。アメリカは 1 億 1000 万人の人口を擁し、日本より何倍も富んでいながら、植民地を一つももっていない。日本は、4 億の人口と世界でもっとも豊富な石炭の埋蔵量とを

もつ中国を略奪した。こういう獲物をどうして保持していくか？ 強大な資本主義が、弱い資本主義が奪いあつめたものをすべてその手から奪取しないであろうと考えるのは、こっけいである。こういう事態のもとで、アメリカ人は平然としていられるであろうか？ 強大な資本家と弱い資本家とが隣りあわせていながら、前者が後者から奪取しないと考えることができるであろうか？ もしそうだったら彼らになんの値うちがあるだろうか？ しかし、このような情勢のもとで、われわれは平気でいられるだろうか、そして共産主義者として、「われわれはこれらの国の内部で共産主義を宣伝するであろう」と言うだけですまされるであろうか。これは正しいことではあるが、これがすべてではない。共産主義政策の実践的課題は、この敵意を利用して、彼らをたがいにいがみ合わせることである。そこに、新しい情勢が生まれる。二つの帝国主義国、日本とアメリカをとってみるなら——両者はたたかおうとのぞんでおり、世界制覇をめざして、略奪する権利をめざして、たたかうであろう。日本は、あらゆる最新の技術的発明と純アジア的拷問とを結びつけた前代未聞の残虐なやり方で朝鮮を略奪しているが、この略奪をつづけるためにたたかうであろう。つい最近われわれは、日本人がなにをやっているかをかたっている朝鮮の一新聞を受けとった。ここにはツァーリズムのあらゆる方式、あらゆる最新の技術的進歩と、純アジア的拷問制度、前代未聞の残虐性との結合がある。しかし、この朝鮮というおいしいご馳走を、アメリカ人はもぎとろうと考えている。」(第 31 卷『ロシア共産党(ボ)モスクワ組織の活動分子の会合での演説』P449～450)

三つの基本的な対立とは①日本とアメリカとの矛盾②アメリカと、残りの資本主義世界全体との矛盾③協商国とドイツとのあいだの矛盾のことで、この眼力も凄い。

レーニンの思想も当時の政策課題も無視して切り貼りされた(5)の「議論(?)」

石川先生は(5)として次のように述べています。

「(5)国家独占資本主義を、レーニンは、これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階ととらえます。資本主義の経済を『数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化すること』——これは社会主義革命が直面するもっとも困難な課題の一つだが、それは『資本主義のもっとも発達した諸形態』つまり『記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関』を手がかりに実現することができる(全集第 27 卷、84-85 ページ)。国家独占資本主義は、そのために必要な『高度な技術を装備した機構』をもたらすもので、『社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の階段の一段』(全集第 25 卷 386 ページ)であるというのです。

以上が、レーニンの議論のあらましです。」と。

最初に「(全集第 27 卷 84-85 ページ)」として抜粋、引用(?)したのは、ロシア社会民主労働党(ボ)の第七回大会でのレーニンの「戦争と講和についての報告」の一部で、内容は、生まれたばかりのソヴィエト政権の喫緊の課題である、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織する」ことについて訴えたものです。それに続けて石川先生がシームレスに「(全集第 25 卷 386 ページ)」として引用したのは『さしせまる破局、それとどうたたかうか』の一部で、資本主義の発達の遅れたロシアが共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいとり、二つの帝国主義陣営の世界大戦争のまっただ中において、一箇所に足ぶみをしていることができない状況のもとで、社会

主義へ向かっての「旗幟鮮明、な闘いの方向を示したものです。

これらは、その時々ロシアの未来を左右するきわめて重要な実践的課題の提起であり、石川先生が机上でレーニンの言葉を切り張りしたり、「直感」的に推測したりする材料ではありません。これらの文章を通じて、私たちがやるべきことがあるとすれば、それは、ここに書かれていることが当時の状況の中で正しい判断であったかどうかということの検証です。現実基礎を置く検証を机上で行うのであれば、それは石川先生にとっても私たち読者にとっても意味のある行為となり得るものです。

石川先生は抜粋で私たち読者になにを訴えたいのか

⑦石川先生の「戦争と講和についての報告」からの抜粋、引用文について

まずはじめに、石川先生が「国家独占資本主義を、レーニンは、これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階ととらえます」として、ロシア社会民主労働党(ボ)の第七回大会でのレーニンの「戦争と講和についての報告」からフレーズを拾い、石川先生の意図に合わせて「編集」した文章について、そこでレーニンがなにを言っているのか、より詳しく、見てみましょう。

この党大会は、10月社会主義革命後、はじめてひらかれたもので、国内の反革命勢力が息を潜め、その後の激しい内戦が始まるまえの国内的には比較的平和な時期に、当初ドイツとの戦争に積極的だったレーニンが兵士(農民)が疲弊しきっていることをアンケートで知り、ドイツとの屈辱的な講和によって、なにがなんでも、息継ぎをしなければならぬことを痛感している時期に、ペトログラードでひらかれたものです。

大会の主要な議題のひとつは、ソヴェト共和国が当面する二つのきわめて困難な任務、ソヴェト共和国を「社会主義的経済的有機体に組織すること」と「国際問題」(ドイツとの講和の問題の解決)で、レーニンはこれらの問題を「戦争と講和についての報告」として党を代表して報告しました。

石川先生が拾ったフレーズがどんな文脈で使われた言葉か、レーニンはこの『報告』で何を言っているのか、いっしょに見てみましょう。

*なお、**ゴシック文字の部分**が石川先生が拾ったり、アレンジしたフレーズです。

『戦争と講和についての報告』の関係する部分の抜粋。

「……ブルジョア革命が当面したただ一つの任務は、以前の社会のすべてのきずなを一掃し、すて去り、破壊するということであった。あらゆるブルジョア革命は、この任務を遂行することによって、この革命にもとめられているいっさいのことを遂行する。すなわち、それは、資本主義の成長を強めるのである。

社会主義革命はこれとはまったく異なった状態にある。歴史のジグザグによって、社会主義革命をはじめなければならなかった国にとって、その国がおくれているほど、古い資本主義的関係から社会主義的関係への移行は、それだけ困難である。ここでは、破壊という任務のうえに、新しい、前代未聞の困難な任務、——組織的任務がつけくわわる。

……ソヴェト共和国は一挙に生まれた。だがまだ、二つのきわめて困難な任務(「社会主義的経済的有機体に組織すること」と「国際問題」——注青山)がのこっていた。その解決は、わが国の革命が最初の数カ月におこなったような凱進行進ではけっしてありえなかった。——これからさき**社会主義革命が、巨大な困難を伴う任務**に当面するだろうということについては、われわれには疑問はなかったし、また、ありえなかった。

第一に、それは、あらゆる社会主義革命が当面する内部的組織という任務であった。社会主義革命がブルジョア革命と異なる点は、後者のばあいには、資本主義的關係のできあいの形態があるが、ソヴィエト権力——プロレタリア権力——は、**資本主義のもっとも発達した諸形態**をとりあげないとすれば、これらのできあいの諸關係をうけとるわけではないということにある。それも、このもっとも発達した諸形態も、実は、工業の小さな上層をとらえていただけであって、農業にはまだほんのわずかししかふれていない。**記帳の組織、巨大企業の統制、国家經濟機関全体を、一つの巨大な機構に、数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する經濟的有機体に転化すること**、——これこそわれわれの肩かかっている巨大な組織上の任務である。この任務は、現在の労働条件のもとでは、われわれが首尾よく内亂の任務を解決したときのように、けっして「ウラー」をさげんで解決することをゆるさなかった。問題の本質そのものが、このような解決をゆるさなかった。……わが革命の任務にたいして考えぶかい態度をとろうとした人には、だれの目にも、自己規律という困難な、長い道によってのみ、戦争が資本主義社会にもたらした腐敗のうちかつことができるといふこと、また、きわめて困難な、長い不屈の道によってのみ、この腐敗を克服し、増大していく腐敗分子を征服できるといふことが、ただちに明らかとなった。この腐敗分子は、革命とは、それからできるだけ多くのものを取りこんでおいて、古いきずなからのがれる方法であるとみなしたのである。こういう連中が数多く出てくることは、信じられないくらいに崩壊の時期の小ブルジョア的な国では、避けられないことであった。そして彼らとの、百倍も困難な、すこしも目ざましい立場をあたえてくれる見込みのない闘争がひかえている——われわれはたったいまこのたたかいを開始したばかりである。」(P83-85)

石川先生は、この「戦争と講和についての報告」から、下記のような文章をつくり上げました。

「資本主義の經濟を『数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する經濟的有機体に転化すること』——これは社会主義革命が直面するもっとも困難な課題の一つだが、それは『資本主義のもっとも発達した諸形態』つまり『記帳の組織、巨大企業の統制、国家經濟機関』を手がかりに実現することができる(全集第27巻、84-85ページ)。」

この石川先生の文章は、ご覧のとおり、原文の最後のゴシックのセンテンス「**記帳の組織、巨大企業の統制、国家經濟機関全体を、一つの巨大な機構に、数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する經濟的有機体に転化すること**」という文章を、「記帳の組織、巨大企業の統制、国家經濟機関」と「数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する經濟的有機体に転化すること」との二つに分けたうえで、それを前後を逆にし、その間に「**社会主義革命が、巨大な困難を伴う任務**」であるということと「**資本主義のもっとも発達した諸形態**」という言葉を挿入してできており、あたかも、レーニンが「国家独占資本主義を、これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階ととらえ」た「議論」の一部ででもあるかのように書かれています。しかも、「『資本主義のもっとも発達した諸形態』つまり『記帳の組織、巨大企業の統制、国家經濟機関』」とストレートに結びつけることによって、レーニンがこの報告のなかで「資本主義のもっとも発達した諸形態」ですら「実は、工業の小さな上層をとらえていただけであって、農業にはまだほんのわずかししかふれていない」と指摘していることを無視してい

ます。同時に、「数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化する」課題に不可欠な、レーニンが『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタゴフ）への回答』（1916年執筆 全集 第23巻 P16~20）で述べた「銀行をにぎらないでは、生産手段の私的所有を廃止しないでは、資本主義に打ちかつことはできない。しかし、ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織することなしには、全勤労大衆を、すなわち、プロレタリアをも、半プロレタリアをも、小農民をもひきいて、彼らの隊列、彼らの勢力、彼らの国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには、これらの革命的措置を実行することはできない。」という言葉などまったく眼中にありません。

このように石川先生は、『戦争と講和についての報告』を、レーニンが「国家独占資本主義を、これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階ととらえた「議論」の一部のように読者に思わせ、『記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関』を手がかりに」いとも簡単に「資本主義の経済を『数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化すること』」ができると主張しているかのような印象を読者に与えようとしています。

しかし、この『戦争と講和についての報告』のこの部分は、読んでお分かりのとおり、ソヴェト共和国を「社会主義的経済的有機体に組織すること」について述べたもので、「国家独占資本主義を、これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階ととらえた「議論」の一部などではありません。

レーニンは、ここで、ロシア革命に「新しい、前代未聞の困難な任務、——組織的任務」がつけくわわったが、それは想定内のことであること、そして、この「あらゆる社会主義革命が当面する内部的組織という任務」は、ソヴェト共和国の人民の肩かかっている巨大な組織上の任務であり、資本主義的な「記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関全体」を、一つの巨大な機構に、数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化することであることを述べています。

そして、「記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関全体を、一つの巨大な機構に、数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化すること」、このことを実現するためには、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織すること」、「全勤労大衆を、すなわち、プロレタリアをも、半プロレタリアをも、小農民をもひきいて、彼らの隊列、彼らの勢力、彼らの国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせること」が必要不可欠な条件なのです。

レーニンの「戦争と講和についての報告」のこの部分は、ソヴェト共和国の最も焦眉な実践的課題として、このことを言っているのです。

そして、「資本主義のもっとも発展した諸形態」さえも「実は、工業の小さな上層をとらえていただけであって、農業にはまだほんのわずかしかふれていない」ことを述べている（それも、資本蓄積を目的として——青山注）レーニンが、「これ以上ないほどに社会主義の準備を完了した資本主義の歴史的な段階」などというとらえ方をするのでしょうか。

石川先生の引用がいかに滑稽か、簡単な例を示しましょう。

ある料理研究家が講演で「十分ではないがここにある野菜などの材料をじっくり煮込めばマイルドな美味しいスープができる」と言ったらそれを聞いた石川記者が文章を二つに

分けて前後を逆にして、「ある料理研究家は「マイルドな美味しいスープ」は「野菜」という「材料」で出来ていると言った」と書いたとしたら、石川先生はどんな感想をもつのだろうか。

ある作家の本の紹介、批判をする場合、まず一番大切なことは、著者に言っていることを正しく伝えることではないのか。こんなペテン師かマジシャンがやるようなことを学者がやってはいけないと思います。

同じように「ひとまとまりの文章」を「二つに分ける」やり方は不破さんが使った手法ですが、その点についてはあとで触れたいと思います。

なお、石川先生の「資本主義のもっとも発達した諸形態」＝「記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関」として、この「記帳と統制」によって社会主義を建設するという薄っぺらな「記帳と統制」の捉え方の源流は、「十月革命で政権をとったあと、国民経済にたいする『記帳と統制』を組織すれば、それがそのまま社会主義経済の建設につながる、という路線」をレーニンが取ったと言っている（『前衛』No904 2014年1月号参照）不破さんのつくった新「定説」にあります。

④『さしせまる破局、それとどうたたかうか』でレーニンはなにを言っているのか

次に、「(全集第25巻 386ページ)」として抜粋している「文章」、10月社会主義革命前夜の1917年9月10～14日に書いた『さしせまる破局、それとどうたたかうか』の中から抜粋したフレーズに係る部分でレーニンが何を言っているのか見てみましょう。

『さしせまる破局、それとどうたたかうか』の関連する部分の抜粋。

「一般に歴史では、とくに戦時には、一箇所に足ぶみをしていることはできない。前進するか、それとも後退するか、どちらかにしなければならない。共和制と民主主義を革命的方法でたたかいとった二十世紀のロシアでは、社会主義にむかって**すすま**ないでは、社会主義にむかって**何歩**かすすめないでは、前進することは**できない**（この何歩かは、技術と文化の水準によって制約され、規定される。農民の農業に大規模機械経営を「導入」することはできないが、砂糖生産では、それを廃止することはできない）。

もし前進をおそれるとすれば、**それは**、ケレンスキーらの諸君が、ミリュコフやブレハーノフらを狂喜させながら、ツェレテリやチェルノフらの愚かな手助けをうけて、やっているように、後退することを**意味する**。

戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめ、**それによって**、人類を社会主義にむかって、異常に近づけたが、これこそ歴史の弁証法である。

帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である。そしてこれは、戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を生みだすからだけではなく——もし社会主義が経済的に成熟していないならば、どのような蜂起も社会主義を生みだしはしないであろう——、国家独占資本主義が、**社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義と名づけられる一段のあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の階段の一段である**からである。



わがエス・エルとメンシェヴィキは社会主義の問題を、空論的に、棒暗記したがよく理解できなかった教義の立場からとりあげている。彼らは、社会主義をなにか遠い先の、不明な、もうろうとした未来のことと考えている。

ところが社会主義は、いまや、現代資本主義のすべての窓からわれわれをながめている。社会主義は、この最新の資本主義にもとづく一歩前進をなす一つ一つの重大な方策から、直接に、**実践的に**、うかびあがっている。」(レーニン全集 第 25 巻 『さしせまる破局、それとどうたたかうか』 P386~387)

この文章は、二つの帝国主義陣営の世界大戦争のまっただ中で、資本主義の発達の遅れたロシアが、共和制と民主主義を革命的な方法でたたかいとり、一箇所に足ぶみをしていることができない状況、さしせまる破局とたたかい、社会主義にむかって一歩でも前へすすむ以外に選択の余地がないなかで、凶らずも歴史のトップランナーに立たされようとしているときに、「**旗幟鮮明**」な闘いの方向を示したものです。

このレーニンの認識が正しかったのか、誤っていたのか、見てみましょう。

当時、「戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめた」という認識は、各国が「戦時国家——国家独占資本主義」化を強めており、正しい**事実認識**であった。先進国の「国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも**完全な物質的準備**であり、社会主義の**入口**である」という認識も、**基本的に正しい**。なぜなら、先進国の「国家独占資本主義」は共産主義社会に直結する「**完全な物質的準備**」はできていないが、社会主義建設の基盤はできていた。共産主義社会に直結する「**完全な物質的準備**」と言う点で言えば、現代の日本ですら、かなり近づいていると思うが「**完全**」ではない。そして、「国家独占資本主義と社会主義とのあいだにはどんな中間的段階もないような歴史の階段の一段である」という認識も、**新経済政策**での「国家独占資本主義」と同様の認識であるならば「物質的準備」という点で誤りではない。だから、「帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である」というレーニンが『さしせまる破局、それとどうたたかうか』で述べた認識は正しかった。もちろん、プロレタリアートの政治的団結力は不十分だったが。

私は、このように、当時のレーニンの認識は基本的に正しかったと思います。詳しくは、「②「**全般的危機**」論の克服と帝国主義論の発展にかんして(P22~23)」と [HP「4-13☆レーニンの資本主義観、社会主義経済建設の取り組み、革命論への、反共三文文筆家のような歪曲と嘲笑、それでもコミニストか」](#)を参照して下さい。

しかし、石川先生は、「以上が、レーニンの議論のあらましです」というだけで、これら二つの文章で述べられていることが、当時、正しい認識・主張だったのか誤りだったのか、誤りだとすればどう考えればよかったのか、何の意見も述べない。

これは本来なら不思議なことだが、石川先生(たち)にとっては、当時、正しい認識だったかどうかなどということは、どうでもいいことなのかもしれません。

なぜなら、当時の資本主義の発展段階と恐慌に対する政府・中央銀行の対応状況のもとで、マルクスとエンゲルスが「**恐慌**」は「**政治的変革の最も強力な槓杆のひとつ**である」というと、不破さんはマルクスが「**恐慌=革命**」説をとっていたと言い、レーニンが「**帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である**」といえ、不破さんは「**帝国主義段階を『死滅しつつある資本主義』と規定し、『革命近し』という世界的危機論の裏付けにもなった**」と言って、「それらの発言からもうほぼ百年たちましたからね」とレーニンを揶揄する。そして、石川先生は「**直感**」で、資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度は「**国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか**」だと、資本主義の特殊な歴史的段階のなかでの資本の行動などお構いなしに言う。

しかし、科学的社会主義の思想は、資本主義の歴史的発展度合をはかる尺度を「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」の発展の中に見ます。そして、資本主義の特殊な歴史的段階の時々に応じて、「古い社会の変革契機」となる“運動の環”を正確にみさだめて、運動を提起します。

マルクスやエンゲルスやレーニンを笑った人たちは、「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」だと言い、「ルールある資本主義」の実現の夢を追いかけて、グローバル資本の行動によってもたらされた日本の惨憺たる状況を見ようとしません。

このような人たちにとっては、当時、正しい認識だったかどうかなどということは、どうでもいいことなのでしょう。

ちょっと脇道にそれますが

なお、石川先生がおこなった、ひとかたまりの文章を二つに分けて、その間に他の文章を挿入するというトリックと似たようなことを不破さんがおこなっていることはまえに述べましたが、どのようなものか、ちょっと脇道にそれますが、紹介します。

2014年9月9日に行われた「理論活動教室」第2講「マルクスの読み方」③で、不破さんは『資本論』から「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(大月『資本論』② P995F6-9)という文章を引用して、次のように講義をしたとのことでした。

まず、「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。」で文章を切り、「私たちの経験のなかでも『桎梏』化はものすごい形で現れています」と述べ、日本共産党綱領を紹介し、その後で、『資本論』の有名な一文」として後半部分を読み上げたそうです。二つに分離しなければちゃんと意味の通じる文章を分離して、日本共産党綱領の何を紹介したのかは不明ですが、文章の流れからして、不破さんが最近よく言っている、「ものすごい形で現れている『桎梏』化」の例として「温暖化」等のみが語られ、「独占資本」の力の増強が歪んだ「生産手段の集中」と歪んだ「労働の社会化」をもたらし、現代日本で言えば、「産業の空洞化」によって社会全体が崩壊の危機に瀕しつつあることが説明されていないとしたら、「マルクスの読み方」として大まちがいであり、マルクスを修正し、受講生を真理から遠ざける講義であるといえるでしょう。二つに分離された文章を合体させれば、独占資本が資本主義的生産様式の「桎梏」であり、独占資本によって、資本主義的に歪められ、一層発展した生産の社会的性格(生産手段の集中と労働の社会化＝社会的生産力)と資本の私的資本主義的性格とが和解できないレベルに達することを述べていることは、誰にでも分かることです。不破さんは、資本主義の矛盾は「利潤第一主義」からくるものだ、「生産の社会的性格と資本の私的資本主義的性格」との矛盾などない、エンゲルスの誤った理論だとエンゲルスを攻撃しています。しかし、この文章は不破さんのこのような主張を真っ向から否定するものです。だからといって、世の中にはやっぴいことと、やっぴいとはいけないことがあると思う。ペテン的な手法は科学とは無縁です。詳しくはHP「4-3☆「桎梏」についての不破さんの仰天思想」を参照して下さい。

補足説明

当時のソヴェト共和国の最も焦眉な実践的課題についてのより詳しい説明

せっかくですから、読者のみなさんの正しい理解のために、石川先生が『戦争と講和についての報告』から抜粋した箇所の本当の意味をやや詳しく説明させていただきます。

レーニンが「記帳と統制」でやろうとしたこと

次にとり上げる、石川先生の(注)とも関連しますが、レーニンが「記帳と統制」でやろうとしたことは、「資本主義のもっとも発達した諸形態」のなかの「社会主義的経済有機体」づくりに必要な要素も活用しながら、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織する」ことでした。

このことについて、『綱領の改正と党名の変更についての報告』の中に関連する記述があるので見てみましょう。

「われわれがいますぐ綱領を作成できないことは、明らかである。われわれは、綱領の基本的諸命題をつくりあげ、それを小委員会か中央委員会に付託して、基本テーゼを作成させるようにすべきである。あるいは、もっと簡単に、すでにテーゼをつくりあげたブレストリートウスク会議についての決議をもとにして、それを作成してもよい。ロシア革命の経験にもとづいて、ソヴェト権力についてのそういう特徴づけをあたえ、つぎに実践的改革の諸提案をおこなわなければならない。ここで、歴史的部分で、土地と生産の収奪がいまはじめられていることを、指摘しておく必要があるとおもわれる。ここで、われわれは、消費を組織したり、銀行を普遍化し、住民自身がおこなう公共の簿記、計算、統制のための国家施設の全国的な網に、この銀行を変えたりする具体的な任務を提起する。この公共の簿記、計算、統制は、社会主義がさらに歩をすすめる基礎となるものである。このもっとも困難な部分は、わがソヴェト権力の具体的な諸要求の形で定式化すべきだと、私は考える。すなわち、われわれが現在なにをしようとしているか、銀行政策の分野で、また物資の生産の組織や、交換、計算および統制の組織や、労働義務制の実施等々の仕事で、どういう改革をおこなうつもりでいるか、ということである。われわれは、できるようになりしだい、われわれがこの方向でとったいろいろの措置を、小さなものも極小のものもふくめて、これにつけくわえよう。ここでは、われわれがなにをはじめたか、なにが未完成になっているかを、完全に、正確に、明瞭に規定しなければならない。われわれのはじめた仕事の大部分が未完成であることを、われわれはよく知っている。われわれは、綱領のなかで、現にあるもの、われわれがこれからやろうとしているものを、すこしも誇張せずに、完全に客観的に、事実からはなれずに叙述しなければならない。われわれは、ヨーロッパのプロレタリアートにこの真実をしめして、これをやらなければならないのだと言おう。これは、彼らが、ロシア人はこれこれのことをまずやり方でやったが、われわれはそれをもっとうまくやりとげる、と言うようにするためである。そして、**この努力が大衆を熱中させるなら、社会主義革命は不敗となるであろう。(このゴシックは青山のもの)**」(P138)

このように、レーニンは、ソヴェト権力がおこなうべき実践的改革の諸提案として、「記帳と統制」の問題を提起し、これは、「われわれが社会主義の課題を、『収奪者の収奪』という一般的抽象的な定式から銀行および土地の国有化のような具体的な定式に翻訳したこと」であることを述べています。

このような課題を実践する「ソヴェト権力」とはどのような機関なのか

それでは、このような課題を実践する「ソヴェト権力」とはどのような機関なのか、「報告」の続きを見てみましょう。

「つぎに、ソヴェト型の国家の特徴づけをあたえることが、われわれの任務である。この問題については、私は、『国家と革命』という著書のなかで理論上の見解を述べようと努力した。

……ソヴェト権力は一つの機関である。すなわち、大衆がただちに全国的な規模で国家の統治と生産の組織とをまなびはじめるようにさせるための機関である。これははなはだ困難な任務である。……市民は一人のこらず裁判や国の統治に参加しなければならない。そして、われわれにとって重要なことは、勤労者の全員を一人のこらず国家の統治に引き入れることである。これは、はなはだ困難な任務である。しかし、社会主義を少数者の手で、党の手で導入することはできない。社会主義を導入することは、幾千万人が自分でそうすることをまなびとったときに、彼らだけがなしうることである。……われわれは、たぶん自分のしなければならないことをまずいやり方でやっているだろうが、しかし、われわれは大衆に、しなければならないことをするよう促している。もし、わが国の革命がおこなっていることが偶然ではなく——われわれは、それが偶然ではないことを、深く確信しているが——、またわが党の決定の産物でもなくて、マルクスが人民革命と名づけたあらゆる革命、すなわち、人民大衆が、古いブルジョア共和国の綱領を繰りかえすことによってではなく、彼ら自身のスローガンにより、彼ら自身の奮闘によって、みずからおこなうあらゆる革命の不可避免的な産物であるなら、もしわれわれがこのように問題を提出するなら、われわれはもっとも重要なものをなしとげることができるであろう。」(全集第27巻 P138)

このように、ソヴェト権力は大衆が国家の統治と生産の組織とをまなびはじめるようにさせるための機関として位置づけられていました。すくなくとも、レーニンと当時の党はこのような方向にソヴェト権力を発展させることをめざしていました。「国家の統治と生産の組織」、「記帳と統制」はそのように位置づけられていたのです。このように、レーニンの思想には、マルクス・エンゲルスがバリ・コムニオンから学んだ、“by the people”の思想が息づいていたのです。

これがレーニンの考えていた“社会主義革命”です。しかし、残念ながら、不破さんの近くにいる人たちは、不破さんの政治的影響を受けてか、そのことを理解しようとしません。詳しくはHP4-24「[マルクス・エンゲルス・レーニンへの誹謗中傷から現れる不破哲三氏の革命論](#)」を参照して下さい。

そして、レーニンはロシアで革命をつづけることの困難さについて、「ヨーロッパにおける社会主義革命の経済的前提についてよく考えていた人にとっては、ヨーロッパで革命をはじめることははるかに困難であり、われわれのところでは、はるかに容易だが、革命をつづけることはヨーロッパよりもいっそう困難であろうということは、だれの目にもはっきりしないわけにはいかなかった。そしてわれわれがまれにみる困難な、歴史における急転換を体験しなければならないのは、こういう客観情勢の仕業である」(P87-88)、「……もしヨーロッパ革命の生まれるのがおくれるならば、われわれを待っているのは、もっともいたましい敗北であるだろう。なぜなら、われわれには軍隊がないからであり、われわれには組織がないからであり、そしてまた、この二つの任務を、いま解決することはできないからである。」(P97)と述べています。

このように、「記帳と統制」はロシア革命にとって死活的に重要な問題であり、「勤労者の全員を一人のこらず国家の統治に引き入れる」運動の一環として位置づけられていました。だから、「わが国でいまおきていることは狭い党员グループのあいだにのこっていた古い革命前の討論のようなものでなく、いっさいの決議は大衆の討議にかけられる。大衆は、これらの決議を自分の経験によって、事実によって点検することを要求しており、けっして軽々しい言説に熱中もしないし事件の客観的な進行によってしめされる道からふみはずさせられることもない」(P95)と、レーニンは確信していました。

なお、「記帳と統制」について、マルクス(エンゲルスが改ざんしたのかどうかは私にはわかりませんが)は『資本論』で「資本主義的生産様式が解消した後にも」「労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になる」(第3巻第2分冊大月版P1090)ことを述べています。

レーニンも10月社会主義革命以前から、『ペ・キエフスキー(ユ・ピヤタゴフ)への回答』(1916年8月~9月に執筆 全集 第23巻P16~20)で、次のように述べています。

「一般に資本主義、とくこ帝国主義は、民主主義を幻想に変える——だが同時に資本主義は、大衆のなかに民主主義的志向を生みだし、民主主義的制度をつくりだし、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義をめざす大衆との敵対を激化させる。資本主義と帝国主義を打倒することは、どのような、どんなに「理想的な」民主主義的改造をもってしても不可能であって、経済的変革によってのみ可能である。しかし、民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない。銀行をにぎらないでは、生産手段の私的所有を廃止しないでは、資本主義に打ちかつことはできない。しかし、ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織することなしには、全勤労大衆を、すなわち、プロレタリアをも、半プロレタリアをも、小農民をもひきいて、彼らの隊列、彼らの勢力、彼らの国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには、これらの革命的措置を実行することはできない。………社会主義は、あらゆる国家の死滅へ、したがってあらゆる民主主義の死滅へ導く。しかし社会主義は、プロレタリアートの独裁を通じるよりほかには実現されない。ところでこのプロレタリアートの独裁は、ブルジョアジーすなわち国民のなかの少数者にたいする暴力と、民主主義の完全な発展、すなわち、あらゆる国事への、また資本主義廃絶のあらゆる複雑な問題への全国民大衆の、権利を真に同じくした、真に全般的な参加の完全な発展とを結びつけるのである。」と。

このようにレーニンは「十月革命で政権をとる」まえから、「生産手段の私的所有を廃止しないでは、資本主義に打ちかつことはできない」こと、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織することなしには」、「全勤労大衆の国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには」、資本主義に打ちかつことはできないことを述べています。これがレーニンの“革命論”です。

不破さんは、レーニンが「十月革命で政権をとったあと、国民経済にたいする『記帳と統制』を組織すれば、それがそのまま社会主義経済の建設につながる、という路線」を取った、と「記帳と統制」がそろばん教室でマスターできるかのような粗雑な単純化をおこない、石川先生は、「記帳と統制」を「資本主義のもっとも発達した諸形態」とまったく同列に扱う。自分たちの貧困な思想で、豊かな思想を「貧困」なものに「変革」して、自

慢する。これでは、マルクスもエンゲルスもレーニンも、あまりにも可哀想だ。マルクスは「無知は十分な根拠になる」(『資本論』大月版①P404)と言ったが、科学的社会主義を自らの指針とするものにとって「無知は害悪」だ。

マルクスが『資本論』で述べ、レーニンが「記帳と統制」でやろうとしたことは、「資本主義のもっとも発達した諸形態」のなかの「社会主義的経済有機体」づくりに必要な要素も活用しながら、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織する」ことでした。繰り返しますが、これがマルクス・エンゲルス・レーニンの“革命論”です。

不破さんと石川先生に共通しているのは、このようなレーニンの真剣な探求に対する無理解と「記帳と統制」についての自分たちの誤った主張を正当化するための歪曲です。

ソヴェト共和国での「記帳と統制」の重要性を述べているところから、都合のよい言葉をピックアップして、自分の論旨に合うように並べ替えて、「記帳と統制」は「国家独占資本主義」を手がかりに「実現することができる」とレーニンは言っている。これが「レーニンの議論」だ、では、不破さんなみの浅はかさではないでしょうか。

不破氏の関連する謬論については、HP4-12「☆不破哲三氏によるレーニンの「記帳と統制」の概念の歪曲」及び 4-13「☆レーニンの資本主義観、社会主義経済建設の取り組み、革命論への、反共三文文筆家のような歪曲と嘲笑、これでもコミュニストか」を参照して下さい。

石川先生の「新経済政策」と「記帳と統制」とにかかわる謬論について

次に、(注)での石川先生の「新経済政策」と「記帳と統制」とに係わる謬論を見てみたいと思います。

レーニンは 10 月社会主義革命を、次のように、科学的社会主義の正しい歴史観で捉えています。

「わが国の革命がおこなっていることが偶然ではなく——われわれは、それが偶然ではないことを、深く確信しているが——、またわが党の決定の産物でもなくて、マルクスが人民革命と名づけたあらゆる革命、すなわち、人民大衆が、古いブルジョア共和国の綱領を繰り返すことによってではなく、彼ら自身のスローガンにより、彼ら自身の奮闘によって、みずからおこなうあらゆる革命の不可避免的な産物であるなら、もしわれわれがこのように問題を提出するなら、われわれはもっとも重要なものをなしとげることができるであろう」(P138)と。(繰り返しますが、これがマルクス・エンゲルス・レーニンの革命論です。)

このように、未来への確信を持って、社会主義の勝利のために不眠不休の活動をつづけたレーニンも、当時、残念ながら、市場の廃止の方向をめざすことが科学的社会主義のただし道であると考えていました。

しかし、革命直後、市場の廃止の方向をめざしたレーニンも、その誤りをいち早く気づき“新しい経済政策”を実施し、商品も貨幣も市場も残して、「記帳と統制」＝全人民の民主主義的管理を組織することを通じて社会主義を組織すること、労働者階級の権力のもとでの外資導入による国家独占資本主義の構築による社会主義の基盤づくりへのみちを試みたのです。

レーニンは実践の中で学びました。しかし、それは、石川先生が、「この転換は、少な

くとも、国家独占資本主義の特質を『記帳と統制』の強化に見て、これを社会主義の『完全な物質的準備』だとする議論に、大きな見直しをせまるものでした」と言うようなものでは、まったく、ありませんでした。それは、当時、「われわれは、十分な考慮もせずに、小農民的な国で物資の国家的生産と国家的分配とをプロレタリア国家の直接の命令によって共産主義的に組織しようと、考えていた」ことを改め、「個人的利益に、個人的関心に、経済計算に立脚して、小農民的な国で国家資本主義を経ながら社会主義に通じる堅固な橋を、まずはじめに建設する」。そのためには、「プロレタリア国家は、慎重で、勤勉で、手腕のある「経営主」、実直な卸商人にならなければならない」し、労働者階級の国家として「小農民経済から国家資本主義を経て社会主義に導くような」「記帳と統制」の仕方を学び、「社会主義的経済有機体」づくりのために、「新しい社会主義の建築物の経済的土台をすえる」ということでした。

そのことをレーニンは1921年10月14日の演説、「十月革命四周年によせて」で次のように述べています。

「最後の——だがもっとも重要でもあれば、もっとも困難でもあり、またもっとも未完成でもあるわれわれの事業、それは経済建設であり、破壊された封建制の建築物と半ば破壊された資本主義の建築物とのあとに、新しい社会主義の建築物の経済的土台をすえることである。このもっとも重要で困難な事業において、われわれはこのうえなく多くの失敗やこのうえなく多くの誤りをおかした。このような全世界的に新しい事業を、失敗もなく誤りもなくはじめることなど、どうしてできよう！ だがわれわれは、それをはじめた。われわれはそれをやっている。われわれはまさに現在、多くのわれわれの誤りを、わが「新経済政策」によって是正しており、今後どうしたらこういう誤りをおかすことなく小農民的な国に社会主義的建築物を建てることができるかを、まなんでいるのである。

困難はかぎりない。しかしわれわれは、かぎりない困難とたたかうことに慣れてしまった。われわれの敵は、なにかにつけて、われわれのことを「石のように堅い」とか「骨折り政治」の代表者だと、アダナした。だが、われわれもまた学びとった——すくなくとも、革命に必要な別のギリョウを、ある程度まで学びとった。すなわち、これまでの道が当面の時期に不相当であり、不可能であるとわかれば、変化した客観的諸条件を考慮にいれ、われわれの目的にかなった別の道をえらんで、自分の戦術をすばやく急転換するだけの柔軟性、手腕を学びとったのである。

熱狂の波にのって、最初は一般政治的な、のちには軍事的な、人民の熱狂を呼びおこしたわれわれは、こんなにも大きな（一般政治的な任務とも、また軍事的任務ともおなじくらい大きな）経済的任務を、直接この熱狂にのって実現しようと、あてこんでいた。あてこんでいた、——と言うより、つぎのように言ったほうが正しいかも知れない。すなわち、われわれは、十分な考慮もせずに、小農民的な国で物資の国家的生産と国家的分配とをプロレタリア国家の直接の命令によって共産主義的に組織しようと、考えていたのである。実生活は、われわれの誤りをしめした。一連の過渡的段階が必要であった。すなわち、共産主義への移行を準備する——長年にわたる努力によって準備する——ためには、国家資本主義と社会主義とが必要であった。直接に熱狂にのってではなく、大革命によって生みだされた熱狂の助けをかりて、個人的利益に、個人的関心に、経済計算に立脚して、小農民的な国で国家資本主義を経ながら社会主義に通じる堅固な橋を、まずはじめに建設する

よう努力したまえ。さもなければ、諸君は共産主義に近づけないであろう。さもなければ、諸君は幾百万幾千万という人々を共産主義に導くことができないであろう。実生活はわれわれにこうかたった。革命の発展の客観的な経過は、われわれにこうかたったのである。

そしてわれわれは、三年か四年のうちにいくらか急転換を学びとった（急転換が必要となると）が、このわれわれは、また新しい転換、「新経済政策」をも熱心に、注意ぶかく、根気よく（とはいえ、まだまだ熱心さもたりなければ、注意もたりないし、また根気もたりないのだが）学びはじめた。プロレタリア国家は、慎重で、勤勉で、手腕のある「経営主」、実直な卸商人にならなければならない。——そうするよりほかには、プロレタリア国家は、小農民的な国を経済的にひとり立ちさせることはできないし、またいまのところ、現在の条件のもとでは、資本主義的な（ここ当分は資本主義的である）西ヨーロッパと肩をならべて共産主義に移行する道はない。卸商人というものは、共産主義から、天と地ほどかけはなれた経済的類型であるかのようなようである。だが、これは、生きた生活のなかで、小農民経済から国家資本主義を経て社会主義に導くような、まさにそのような矛盾の一つである。個人的関心は生産をたかめる。われわれに必要なことは、まず第一に、ぜひとも生産を増強することである。卸商業は、幾百万という小農民に関心をもたせながら、彼らを結合させて、つぎの段階へ、すなわち、生産そのもののなかでの結合と団結のいろいろな形態へと導く。われわれはすでに、わが経済政策の必要な建てなおしを開始した。われわれはすでにこの分野で、若干の——たしかにたいしたものではなく、部分的なものではあるが、しかし、それにしてもやはり疑いない——成功をおさめている。われわれはこの新しい「科学」の分野では、すでに予科を終了しつつある。しっかりと、たゆまず学びながら、実際の経験によって自分の一步一步を点検しながら、すでにはじめたことを何度やりなおしても自分の誤りを是正することをおそれず、誤りの意義を注意ぶかく探究しながら、われわれは、つぎの学級にすすもう。世界経済と世界政治の諸事情は、この「課程」をわれわれの望んでいたよりもはるかに長く、はるかに困難なものにしたけれども、われわれはその全「課程」をおさめよう。過渡期の苦悩、貧苦、飢餓、崩壊がどんなに苦しくても、どんなことがあっても、われわれは落胆せず、自分の事業を最後の勝利をおさめるまでおすすすめよう。」注）……は本文中の略（1921年10月14日、第33巻「十月革命四周年によせて」（P44~46）「プラウダ」第234号、1921年10月18日）

また、レーニンは1922年2月20日に執筆したクルスキーへの手紙『新経済政策のもとでの司法人民委員部の任務について』で、新経済政策にかんして、次のように述べています。

「同志クルスキー！

司法人民委員部の活動は、どうやら、新経済政策にまだ全然適応していない。

これまではソヴェト権力の戦闘機関は、主として陸軍人民委員部と全ロシア非常委員会であった。いまではとくに戦闘的な役割は、司法人民委員部がになっている。残念ながら、司法人民委員部の指導者たちや、主要な活動家たちはこのことを理解しているようにはみえない。……

新経済政策の分野での司法人民委員部の戦闘的な役割もそれに劣らず重要であるが、この分野での司法人民委員部の弱さと半睡状態は、いっそう言語道断である。われわれが認めたとし、また認めていくのは、国家資本主義だけであること、国家とはつまりわれわれで

あり、われわれ意識的な労働者、われわれ共産主義者である、ということを理解している気配が見られない。したがって、われわれが国家の概念と任務とを理解しているとおり、国家資本主義のわくからはみだしているあらゆる資本主義を制限し、抑制し、統制し、犯罪を現場でとらえて、こっぴどく処罰することを自分の任務として理解しなかった共産主義者たちは、役だたずの共産主義者だと認めなければならないのである。

ここでは司法人民委員部こそ、人民裁判所こそ、とくに戦闘的な、とくに責任のある任務をになっているのである。この任務を理解している気配が見られない。新聞では、新経済政策の悪用について騒ぎたてている。こうした悪用にははてしがなくらいである。

ところが、新経済政策を悪用している卑劣漢どもにたいする模範的な裁判についての騒ぎはどこにあがっているだろうか？ こうした騒ぎは起こっていない。そのような裁判がないからである。司法人民委員部は、これがその仕事だということ、——人民裁判所をひきしめ、ゆすぶり、はたきをかけ、彼らに新経済政策の悪用にたいしては銃殺をもふくめて、容赦なくすばやく処罰することを教えることができないのは、司法人民委員部の責任だということ「忘れて」いる。この責任は司法人民委員部にある。この分野での司法人民委員部の活動には、生きいきとしたものはいささかも見うけられない。そういう活動がないからである。……

新しい民法の編纂がおこなわれている。司法人民委員部は、「流れのままに泳いでいる」。私はそれを知っている。だが司法人民委員部は、流れにさからって戦わなければならない。民法についての古いブルジョア的な概念を取り入れるのではなく（というよりも、彼らが見なっている愚鈍な、古いブルジョア法律家たちにだまされるのではなく）、新しいものを創出しなければならない。「職務上」「ヨーロッパへの順応」方針をとっている外務人民委員部に譲歩するのではなく、この方針と戦い、新しい民法、「私的」契約にたいする新しい態度、等々をつくりあげなければならない。われわれは、「私的なもの」をなにも認めない、われわれにとっては、経済の分野に見られるものはすべて、公法的であって私法的なものではない。われわれはただ国家資本主義を容認するにすぎず、国家とは、前に言ったとおり、われわれである。だから、「私法的」諸関係への国家介入をいっそう広くしなければならない。「私的な」諸契約を取り消す国家の権利を拡大しなければならない。corpus juris romani[ローマ法大全]ではなく、われわれの革命的法意識を「私法関係」に適用しなければならない。このことをどのように賢く、精力的におこなわなければならないかを、系統的に執拗に、ねばりづよく、一連の模範的な裁判によって示さねばならない。このことを学ばず、このことを理解したまらない革命裁判所員や人民裁判官は、党とおして烙印をおし、追放しなければならないのである。……

商売したまえ、儲けたまえ、われわれは諸君にこれは許そう。だが、われわれは、正直にやる諸君の義務、正しい、正確な報告を出す義務、わが共産主義的立法の文面だけでなく、趣旨を重視する義務、わが国の法律からいささかも逸脱しない義務を、三倍も高めよう——これこそ新経済政策についての司法人民委員部の基本的ないまじめとならねばならないのである。わが国で資本主義が「きびしいしつけをうけ」、「礼儀正しく」なるようにさせることが司法人民委員部にできなければ、司法人民委員部がこの法規の違反を取り締り、恥ずかしいほどばかばかしい、「共産主義的に愚鈍な」一億ルーブリとか二億ルーブリといった罰金で処罰するのではなく、銃殺で処罰することができるのを、一連の模範

的な裁判で示さなければ——司法人民委員部はなんの役にも立たないことになり、そうなれば私は、中央委員会に司法人民委員部の責任ある指導者たちを完全に更迭させることを自分の義務と見なすだろう。」(第 45 巻 P611-617『新経済政策のもとでの司法人民委員部の任務について』1922 年 2 月 20 日に執筆、1964 年に『レーニン全集』第五版、第 44 巻に全文発表、手稿によって印刷)

科学的社会主義の見解(マルクス・エンゲルス・レーニンの見解)に身をおく者が「記帳と統制」というとき、それは、「社会主義的経済有機体」をつくるためのアプローチの一つを意味します。そしてレーニンは、当時の「帝国主義」の特徴の一つとしての「国家独占資本主義」ではなく、労働者階級の権力のコントロールのもとでの「国家資本主義」によって「完全な物質的準備」を経て、「新しい社会主義の建築物の経済的土台をすえる」ことによって、革命ロシアを社会主義に導くような道を模索していたのです。レーニンは労働者階級の権力のコントロールのもとでの「国家資本主義」の正しい発展のために、石川先生が言うように「記帳と統制」の「大きな見直しをせまるもの」どころか、その強化のために「司法人民委員部」の力も総動員するよう求めたのです。詳しくは前出 HP「4-13 ☆レーニンの資本主義観、社会主義経済建設の取り組み、革命論への、反共三文文筆家のような歪曲と嘲笑、これでもコミュニストか」も参照して下さい。

〈参考〉

「貨幣」・「商品」・「市場」についての考え方の、私なりの雑ばくな整理。

ご承知の通り、商品経済が発展して、商品が資本として資本主義的生産の環の中に組み込まれると、「市場」は資本主義にとって必須のプラットフォームとなり、「商品」は必須のアイテムとなります。

「資本主義」を解明したマルクスは社会主義社会での消費財の取得方法について、「生産者たちは、たとえば指図証を受け取って、それと引き換えに、社会の消費在庫のなかから自分たちの労働時間に相当する量を引き出すことになるかもしれない。この指図証は貨幣ではない。それは流通しないのである」(大月『資本論』③ P438)と述べていますが、これが、マルクス経済学を学ぶ人たちにとって、「社会主義国」での市場の廃止の根拠になったのではないかと思います。しかし、マルクスは「貨幣を貨幣として特徴づけ商品を商品として特徴づける独自の諸属性や諸機能を貨幣や商品の資本性格から導き出そうとするのは、まちがいのなものであり、また逆に生産資本の諸属性を生産手段としてのその存在様式から引き出すのも、やはりまちがいのなものである。」(『資本論』第 2 巻 大月版 ③P99 B3-101F1)とも述べています。

「商品」交換は経済の技術的側面であり、「資本主義」のもとで、貨幣は「貨幣資本」なり、商品は「商品資本」となるが、社会が「社会主義」に生まれ変わったときには、その資本主義的な性格から解放され、貨幣は貨幣に、商品は商品にもどり、「市場」は価値実現の場から純粋に交換の場にもどる。つまり、資本主義が廃止され、商品資本も貨幣資本も廃止されても、商品も貨幣も市場(配給でなく選択の場)も廃止されることはない。

このように、社会主義社会では貨幣の形態をとった搾取の手段としての資本であるところの貨幣資本はなくなる。合理的な生産のために、当該商品の生産のために投入された労働量を測る価値尺度としての貨幣、商品(購入する財)の交換手段としての貨幣は社会主義の低い段階では存在する。そして、商品は社会主義社会でも残るので、交換の場としての

市場も残る。ただし、商品の価格は社会的に統制された額で設定される。また、社会主義の比較的早期に日用品の多くは貨幣との交換なしで取得できるようになるかもしれない。

私はこのように、考えています。

関連するマルクス・エンゲルス・レーニンの見解の抜粋等を〈参考〉に掲示します。

・資本主義的生産関係のもとでの貨幣制度

資本主義的生産関係のもとでは、「交換価値が資本に発展しないように、とか、あるいは、交換価値を生産する労働は賃労働に発展しないように、とかいうのは、かなわぬ願いであるばかりか、ばかげた願いでもある。」

レキシコン⑤-[70]P167下線部 (マルクス『経済学批判要綱』ⅡP169)

・共産主義の社会では貨幣資本はなくなる

「資本主義のではなく共産主義の社会を考えてみれば、まず第一に貨幣資本は全然なくなり、したがって貨幣資本によってはいつてくる取引の仮装もなくなる。」

『資本論』大月版③ P385B11-10)

・社会的生産では貨幣資本はなくなる

「社会的生産では貨幣資本はなくなる。社会は労働力や生産手段をいろいろな事業部門に分配する。生産者たちは、たとえば指図証を受け取って、それと引き換えに、社会の消費在庫のなかから自分たちの労働時間に相当する量を引き出すことになるかもしれない。この指図証は貨幣ではない。それは流通しないのである。」(大月『資本論』ⅡP437-8)

・価値は商品生産とともに消滅する

レキシコン②-[77](カウツキーあてのエンゲルスの手紙 1884.9.20)

・商品だから商品資本なのではない

「貨幣を貨幣として特徴づけ商品を商品として特徴づける独自の諸属性や諸機能を貨幣や商品の資本性格から導き出そうとするのは、まちがいなのであり、また逆に生産資本の諸属性を生産手段としてのその存在様式から引き出すのも、やはりまちがいなのである。」

『資本論』大月版③P99B3-101F1)

・「市場」と社会的分業

「**第一の結論**は、「市場」の概念は、社会的分業——マルクスが言っている「あらゆる商品生産《したがってまた資本主義的生産——と、私から付けくわえよう》の一般的基礎——の概念と、まったく不可分のものである、ということである。社会的分業と商品生産とがあらわれるところに、また、あらわれるかぎりで、「市場」があらわれる。そして市場の大きさは、社会的分業の専門化の程度と、不可分にむすびついている。」

(レーニン全集 第一巻「いわゆる市場問題について」P96～103 1893年秋)

・「商品」と資本主義経済

「商品経済は資本主義経済であるという法則、すなわち、ある発展段階で不可避免的に資本主義経済に転化するという法則」(レーニン全集 第一巻「人民の友」とはなにか P214)

なおレーニンは「新経済政策」を採用してからも、社会主義建設のそう遠くない時期に「市場」の廃止をすることが正しい選択であると考えていたように思われます(これは、私の推測です)。

⑥私が説明してきたレーニンの認識の何が問題なのか

これまで見てきたように、21 ページで石川先生が言っている「レーニンの議論のあらまし」なるものは、レーニンの考えをただしく反映したものではありませんし、レーニンの考えを歴史のなかでとらえ、歴史のなかで評価するというものではありませんでした。

レーニンは、これまで見てきたように、第一次世界大戦が、イギリスとフランスを主とするグループとドイツを中心とするグループという「最大の資本主義的巨人」の二つのグループの経済競争から不可避免的に導かれたものであること。この戦争がドイツを中心とするグループに「資本主義的生産の発展の新しいやり方」、「資本主義の巨大な力と国家の巨大な力とを単一の機構に結合するという原理」をもちこんだこと。この戦争の進展が、各国の「戦時国家——国家独占資本主義」化を強め、独占資本主義の国家独占資本主義への転化を異常にはやめたこと。「国家独占資本主義」は、「帝国主義」の時代に国家と独占資本が結びついた、先進国の「社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口」であること。それによって、人類を社会主義にむかって、異常に近づけたことを述べています。つまり、レーニンは、「帝国主義」という資本主義の特殊な歴史的段階における一つの傾向的な特徴である「国家独占資本主義」の「社会主義のためのもっとも完全な物質的準備」という、「社会主義のための物質的準備」における積極面を評価しています。

レーニンの時代の「帝国主義」、ドイツを中心とするグループが「資本主義的生産の発展の新しいやり方」、「資本主義の巨大な力と国家の巨大な力とを単一の機構に結合するという原理」をもちこみ「戦時国家——国家独占資本主義」化を強めたこと、これらをトータルに見て、歴史のなかで捉え、歴史のなかで評価しないで、第2次大戦後の「帝国主義」や「国家独占資本主義」と「混同、させる石川先生の論法は、次の『全般的危機』論の克服と帝国主義論の発展」では自らにツバを吐くこととなります。

②「全般的危機」論の克服と帝国主義論の発展にかんして(P22～23)

石川先生は、先生たちが今のアメリカも「帝国主義」と呼び、そのアメリカが繁栄している、だから、レーニンの言う「帝国主義＝最後の段階」論は乗り越えられた、と言う。これなら、論争に負けることはない。しかし、これでは、レーニンだけではなく、歴史上のあらゆる偉人があまりにも可哀想すぎないか。

では、レーニンは「帝国主義」をどう定義しているのか。レーニンの「帝国主義」とはどのようなもので、それは歴史の真実を表現しているものなのか。いっしょに見てみましょう。

当時、レーニンは「日和見主義（社会排外主義の形をとった）がヨーロッパの労働運動にたいしてかちとった奇怪な、いまわしい勝利」と、世界を覆う「帝国主義」との関連を「今日の社会主義の根本問題である」と捉え、当時の「帝国主義」を全面的に捉えるため1915年から1916年にかけて集中的な研究・整理を行いました。レーニンは「現代が帝国主義時代であり、いまの戦争が帝国主義戦争である」という歴史的な状況の中で、当時の「帝国主義」の定義づけをおこないました。1916年10月執筆の『帝国主義と社会主義の分裂』（全集 第23巻 P112～114）で、「帝国主義のできるだけ正確で完全な定義からはじめなければならない。帝国主義とは、資本主義の特殊な歴史的段階である。この特殊性は三とおりである。」として、青山が以下に要約した「帝国主義の三つの特殊性」の内容を、詳しく

述べています。

帝国主義の三つの特殊性の青山の要約

(一) 独占資本主義(=独占が自由競争にとってかわったことが、帝国主義の根本的な経済的特徴であり、その本質である)。独占主義は、五つの主要な形態をとって現われる。

(一) カルテル、シンジケート、トラスト。生産の集中。

(二) 大銀行の独占的地位。三つないし五つの巨大銀行が、アメリカ、フランス、ドイツの経済生活全体を支配している。

(三) トラストと金融寡頭制による原料資源の占取。

(四) 国際的カルテルによる世界の(経済的)分割がはじまっている。

(五) 世界の地域的分割(植民地)は終了した。

(二) 寄生的な、または腐敗しつつある資本主義。

第一に、生産手段の私的所有のもとでのあらゆる独占の特徴である腐敗の傾向に現れている。

第二に、資本主義の腐敗は、金利生活者、すなわち「利札切り」で生活する資本家の膨大な層が作りだされていることに現れている。

第三に、資本輸出は自乗された寄生性である。

第四に、「金融資本は支配をめざすものであって、自由をめざすものではない」。全線にわたる政治的反動は、帝国主義の特性である。収賄、大じかけな買収、各種の疑獄。

第五に、領土併合と切りはなせないようにむすびついた被抑圧民族の搾取、「文明」世界の、幾億人の非文明民族の肉体にくっついた寄生虫化。

(三) 死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義。

独占と労働の大がかりな社会化は、資本主義から社会主義への移行しつつある資本主義である。

レーニンは、「帝国主義のこのような定義を述べることによって」、カウツキーが「帝国主義とは金融資本の『このんで取る』政策」と見て「帝国主義の政治を帝国主義の経済から切りはなし、政治における独占主義を経済における独占主義から切りはなす」のに対し、帝国主義を資本主義の特殊な歴史的段階、「資本主義の一段階」と見ることによって、「帝国主義のもっとも深刻な諸矛盾」の曝露に努めました。

そして、これに続く、『国家と革命』と『さしせまる破局、それとどうたたかうか』では、「帝国主義」について、帝国主義は銀行資本の時代、巨大な資本主義的独占体の時代、独占資本主義が国家独占資本主義へ成長転化する時代であり、帝国主義が「プロレタリアにたいする弾圧の強化と関連して、『国家機構』の異常な強化、国家機構の官僚的および軍事的機関の前代未聞の拡大をしめしている」(『国家と革命』)こと、「帝国主義戦争は、社会主義革命の前夜である」こと、そしてそれは、「戦争がその惨禍によってプロレタリアの蜂起を生みだすからだけではなく」、「国家独占資本主義が、社会主義のためのもっとも完全な物質的準備」をし、経済的に成熟していからである(『さしせまる破局、それとどうたたかうか』)ことを述べています。

レーニンの言う「帝国主義」とは

これまで見てきたように、レーニンの言う「帝国主義」とは、事実にもとづき、当時の

資本主義国の姿を曝露し、労働者階級のたたかう方向を明確にしたものです。

だから、当時の「帝国主義」と米国が戦後とった「新しい帝国主義」政策とを同じ「帝国主義」で括って、レーニンの考察が誤りででもあるかのように言うのは、自らの頭の混乱にもとずきレーニンを誹謗するもので、まともな「議論」とはいえません。

さきに引用したように、レーニンは『帝国主義と社会主義の分裂』で、「帝国主義が死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義であるという理由は、明らかである。資本主義から生じる独占は、すでに資本主義の死滅であり、資本主義から社会主義への移行の始まりである。帝国主義による労働の大きかりな社会化（弁護論者のブルジョア経済学者が「絡み合い」と呼んでいるもの）も、やはりこのことを意味する」と述べているのです。つまり、当時の「帝国主義」が「国家独占資本主義」への傾向を強め、生産手段の独占と生産の社会化をすすめることによって、資本主義から社会主義への移行の物質的準備を整えたことを「死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義」、「資本主義から社会主義への移行の始まり」と言ったのです。レーニンの考察した「国家独占資本主義」は当時の「帝国主義」の特徴の一つで、戦時体制と結びついた国家と独占資本の一体化しつつある姿を表現したもので、社会主義社会で使える技術的な要素も少なからずあります。だから、レーニンも生産力と生産の社会化の発展を図るために、「新経済政策」で国家(=労働者階級の権力)のコントロールのもとで「資本」を活用する「国家資本主義」による経済建設を社会主義をめざす経済建設の中心に据えようとして、米国等から資本の導入を図るために尽力し、「国家資本主義」という言葉も使いました。

余談ですが、エンゲルスが資本主義の発展のなかで「プロレタリアートとブルジョアジーの対立」がますます明らかになることを述べたこと(HP4-8「☆不破さんは、『プロレタリアートとブルジョアジーの対立』は『資本主義の発生の時点から』あるのに、事態の発展のなかで明るみに出るのは矛盾だと、自分の理解力のなさを根拠にエンゲルスを誹謗している。」を参照して下さい。)、あげ足とりの不破さんに、レーニンの「国家資本主義」という言葉もあげ足をとられそうです。もっと危ない言葉は、まえにも、『新経済政策のもとでの司法人民委員部の任務について』で出てきた「銃殺で処罰する」とか、任務を迅速・確実に遂行しない党員にたいする「死刑」判決なども、そのうち不破さんの批判に晒されるかも知れません。

レーニンの言う「死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義」とは、上記のような歴史の一コマのなかで、上記のような意味合いで使用された言葉です。そして、レーニンは、当時の先進資本主義国を上記のような特徴を持つ「帝国主義」と規定し、「先進帝国主義諸国」と表現しましたが、その内容は事実に即したものです。

当時の「帝国主義」段階が、「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」が深まり、「死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義」であることは間違いありません。しかし、「帝国主義」化によって「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」が深まり、労働者階級との矛盾が深まったことと、「革命近し」という情勢認識とは、まったく、次元のちがうものです。

また、「革命近し」という情勢認識と資本主義の「世界的危機」とも同一ではありません。だから、現代のように資本主義が「世界的危機」に陥って、水野和夫氏のようなマルクスを知らない経済学者ですら資本主義の限界を悟り『資本主義の終焉と歴史の危機』を感

じるところまで経済が進んでも、しっかりした科学的社会主義の党がなければ「革命近し」という情勢は生まれません。それは、いまの日本が示しています。

レーニンは当時の情勢をどのようにみていたか

レーニンは、「世界帝国主義」との「最後の決戦」について、10月社会主義革命直後の1918年2月25日の『プラウダ』（夕刊）の『きびしいが、必要な教訓』で次のように述べています。

「いまわれわれのまえに立ちはだかっているのは、文化のすすんだ、技術的には第一級の装備をほこる、組織的にりっぱに整備された世界帝国主義の巨人である。これとたたかわなければ**ならない**のだ。……

この「最後の決戦」は、先進帝国主義諸国に社会主義革命が燃えひろがるときにはじめて燃えあがるであろう。このような革命は、疑いもなく月とともに、週とともに、成熟し、つよまっていくであろう。この成熟していく勢力を援助し**なければならない**。これを援助する道を**こころえ**なければならない。隣国のソヴェト社会主義共和国を、あきらかにそこに軍隊がないような時機に、潰滅にゆだねることは、それをたすけるどころか、危害をくわえることである。

「われわれは、ヨーロッパにおける社会主義の勝利に賭ける」という偉大なスローガンを、空文句に変えてはならない。社会主義の徹底的な勝利という長期の困難な道を考慮するならば、このことは真理である。全体としての「社会主義革命の時代」全体を取りあげるならば、それは、争う余地のない哲学史的な真理である。しかし、あらゆる抽象的真理は、これを**どれであれ**（なんの分析もせず—青山注）具体的情勢にあてはめようとするならば、空文句となってしまう」（全集 第二七巻『きびしいが、必要な教訓』P54~56『プラウダ』（夕刊）第三五号、1918年2月25日）、と。

そして、1918年3月に開かれたロシア社会民主労働党（ボ）の第七回大会では、次のように述べています。

「革命は、われわれが待っていたように、早くはやってこないであろう。歴史はこのことをしめた。このことを事実として受けとることができなければならないし、先進諸国における世界社会主義革命は、ロシアで——ニコライとラスプーチンの国で、革命がはじまったように、たやすくはじめることはできないということ、このことを考慮に入れることができなければならない。ロシアでは、住民の大部分にとっては、辺境にどんな民族が住んでいようと、そこでなにがおころうと、どうでもよいことであった。こういう国では、革命をはじめることは容易であった。それは——羽毛をもちあげるようなものであった。

しかし、資本主義が発達し、最後の一人まで民主主義的文化と組織性があたえられている国では、準備もなしに革命をはじめることは、まちがいであり、ばかげている。ここではわれわれは、社会主義革命の苦しみにみちた開始期にやっとさしかかったばかりである。これが事実である。われわれにわからず、だれにもわからないことは、この社会主義革命が数週間中に、それどころか数日中に勝利できるものかどうかということである——このことは十分にありうることであろう——、しかしこれを賭けてはならない。避けられない異常な困難、異常に苦しい敗北にたいする備えをもつことが必要である。なぜなら、ヨーロッパでは、革命は、あすはじまるかもしれないとはいえ、まだはじまっていないからであり、いったんはじまるならば、もちろん、われわれの疑惑がわれわれを苦しめるこ

ともないであろうし、革命戦争の問題もなくなるであろうし、そしてひとつづきの凱旋行進となるだろう。そうなるであろう、そうなることは避けられないであろう、しかしいまはまだそうではない。」(P93-95)

「……歴史というものは、革命がいたるところで同時に成熟するほどうまくできてはいないからである。

事件は、帝国主義と衝突する試みとして内乱がはじまる、というような成行きをとってくるだろう。この試みは、帝国主義が腐敗してしまったこと、どの軍隊のなかでもプロレタリア分子が立ちあがっていること、を証明したのである。たしかに、われわれは国際的・世界的な革命をみることであろう。しかしいまのところ、それは非常にきれいな、非常に美しいおとぎ話である」(P98)(第27巻ロシア共産党(ボ)の第七回大会でのレーニンの「戦争と講和についての報告」、と。

先進諸国における世界社会主義革命は、苦しみにみちた開始期にやっとさしかかったばかりである。先進諸国における世界社会主義革命は準備もなしに始まるものではない。これが、レーニンの「先進諸国における世界社会主義革命」についての考え方です。

当時、主要な資本主義国はみな帝国主義的な方向に突き進み、労働者の団結も強まり、ヨーロッパ全体を覆うような革命の可能性は十分に存在していました。だから、レーニンは、ロシア革命によって凶らずもロシアが革命運動の先頭を走らざるを得なくなったとき、ドイツに革命が起きて遅れたロシアを助けてくれることに大きな期待をいただいていた。しかし残念ながら、第一次世界大戦終結後の「世界経済と世界政治の諸事情」の変化によって、「ここ当分は資本主義的である西ヨーロッパ」がつづき、ただちにドイツに革命が起きる可能性は遠のいてしまいました。

そういう認識のもとで、共産主義インタナショナル第三回大会(1921年6月22日ー7月12日)は開かれた。

しかし、情勢は流動的である。大会中の7月11日、ドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリーおよびイタリアの代表団員の会議において、レーニンは「きのうの『プラウダ』で私が読んだ若干の報道は、攻勢の時機が大会でわれわれが予想したよりも近いかもしれないということを、私に納得させた」ことを述べています。

その理由として、三つの報道を示し、「このことは、ヨーロッパには、われわれが考えていたよりも大量の可燃性物質があることを証明している」こと、「主要な諸国——ドイツ、チェコスロヴァキア、イタリア——における攻勢を互いに調整すること。この点では準備が、たえまない相互作用が、必要である。ヨーロッパは革命をはらんでいるが、革命の日程をあらかじめ作成することはできない。ロシアにいるわれわれは、五年どころか、それ以上でももちこたえるであろう」ことを述べ、「調整」とは、「どういう契機が重要かということ、他の諸国の同志たちが知る点になければならない」こと、「すなわち、すぐれた模範をもっとうまく、もっと速やかにまねるということである」として「ローマで、ファシスト反対闘争を組織するための大衆集会」をローマの労働者がおこなったことをすぐれた模範として学ぶ必要があることを強調しました。(第42巻『共産主義インタナショナル第3回大会』P434~440)

それから4ヶ月後の1921年10月19日付けの「ポーランドの共産主義者への手紙」(第42巻『ポーランドの共産主義者への手紙』P484~486)では、今度はポーランドについて、

レーニンは次のように述べています。

「親愛な同志諸君！

ポーランドにおける共産主義運動の成長についてわれわれの新聞にときおりはいる断片的な情報から判断すると、また（それ以上に）ポーランドの若干の有力な同志の報道から判断すると、ポーランドでは革命が成熟しつつある。

労働者革命が成熟しつつある。ポーランド社会党（ロシアふうといえばエス・エルとメンシェヴィキ、ヨーロッパふうといえば第二および第二半インタナショナル）の完全な崩壊。労働組合がつぎつぎと共産主義者の味方に移っていること。デモンストレーションの拡大、その他。さしせまった、避けることのできない財政破綻。ポーランドで土地改革の面でブルジョア民主主義派（と小ブルジョアジー）がしでかす大失敗。この失敗はさしせまっており、避けることができない。それは、農村住民の大多数——農民の貧困層全体——を必然的に共産主義者の側におしやる。

財政破綻や、協商国（フランスその他の国）の資本によるポーランドの恥知らずな略奪にともなって、大国主義的、民族的な幻想の事実による暴露が、大衆の、一般の労働者の、一般の百姓の目にみえ、肌を感じることのできる暴露がはしまっている。

もしすべてこのとおりだとすれば、ポーランドにおける革命（ソヴェト革命）は勝利するにちががなく、それもまもなく勝利するにちがいない。こういう事情だとすれば、政府とブルジョアジーが時期尚早の蜂起を流血のなかで鎮圧することによって革命を圧殺するのを、許してはならない。挑発にのってはならない。完全な波が成長してくるまで待つべきである。その波はすべてを一掃し、共産主義者に勝利をもたらすであろう。

ブルジョアジーが 100 人から 300 人の人間を殺しても、事業はほろびない。だが、彼らが殺戮を挑発して、一万人から三万人の労働者を殺すことができるなら、革命が数年間遅らされることさえ可能である。

国会選挙をおこなうことが政府にとって重要であるとするれば、労働者革命と農民の不満との波が国会を征服するために、全力をかたむけなければならない。

挑発にのってはならない。

果実が完全に熟するまで、革命をぜひとも育てあげなければならない。ポーランドで内部からソヴェト権力が勝利すれば、巨大な国際的勝利となる。私の考えでは、現在ソヴェト権力がおさめている国際的勝利が 20 ないし 30 %だとすれば、ポーランドで内部からソヴェト権力が勝利すれば、共産主義革命の国際的勝利は、40 ないし 50 %に、おそらくは 51 %にも達するであろう。というのは、ポーランドは、ドイツ、チェコスロヴァキア、ハンガリーと隣接しており、ソヴェト・ポーランドは、ヴェルサイユ講和のうえにきずかれた全体制を掘りくずすだろうからである。

だからこそ、ポーランドの共産主義者には、世界的な責任がかかっているのである。自分の船の舵をしっかりとらなければならない。挑発にのってはならない。

ダシンスキー一派のドンバルにたいする暴行に報復するのは、骨おりがいのあることだろうか？ もし報復するなら、銃を射たず、傷を負わせることなしに、ダシンスキーを打ちのめすというやり方でおこなうべきである。それ以外であってはならない。あるいは、これは骨おりがいのあることかもしれない。つまり、もし労働者たちがこの厚かましい男をうまく懲らしめることができ、労働者の士気があがり、労働者の犠牲（投獄または銃

殺による) が 5 人ないし 10 人とどまるとすればである。だが、あるいは、骨おりがいのないことかもしれない。われわれのドンバルが残虐な暴行をうけたということのほうが、農民のあいだでの扇動に**いっそう役だつ**のではなからうか？ おそらく、これは、ダシンスキーの横つらをなぐりつけることよりも、**おくれた**農民の同情をわれわれの側に引きつけるうえで、**いっそう効果的**なのではなからうか？ もっと慎重に比較考量すべきである。

共産主義者の挨拶をもって 「レーニン」

このように、レーニンは情勢抜きに「革命近し」などとノー天気なことを言ったことは一度もない。ましてや、帝国主義段階が『死滅しつつある資本主義』だから、『革命近し』などと観念的な結びつけなどしたことは一度もありません。事実に基づかない批判はケンカだ。科学的社会主義はケンカを売ってはならない。ケンカを売った時点で、その人は科学的社会主義から脱落する。

そして、1921 年 10 月 14 日の演説、「十月革命四周年によせて」では、以下のように述べています。

「帝国主義戦争の問題、現在全世界を制覇している金融資本の国際政治の問題——この国際政治が新しい帝国主義戦争を**不可避的に**生みだし、ひと握りの「先進」強国が立ちおくれた弱小諸民族に加える民族的抑圧、略奪、強奪、絞殺の前代未聞の激化を不可避的に生み出すのである——、この問題は、1914 年このかた地球上のすべての国々の政治全体の基本問題となった。これは、幾千万という人々の生死の問題である。これは、われわれの目のまえでブルジョアジーが準備している、そしてわれわれの目のまえで資本主義のなかから成長してくる、つぎの帝国主義戦争では 2000 万の人間が（1914-1918 年の戦争と、いまなお終わっていない、これを補う、いくつかの「小」戦争では 1000 万の人間がころされたのにたいして）ころされるかも知れないという問題であり、この避けがたい（資本主義が存続するかぎり）きたるべき戦争では 6000 万の人間がかたわになるかも知れない（1914 - 1918 年には 3000 万の人間がかたわになったのにたいして）という問題である。

この問題でも、わが十月革命は世界史の新時代をひらいた。ブルジョアジーの召使や、エス・エルとかメンシェヴィキというブルジョアジーの太鼓もち、全世界の小ブルジョア的なえせ「社会主義的」民主主義派という太鼓もちどもは、「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」というスローガンをばかにしていた。だが、このスローガンはただ一つの**真理**であることがわかった。——それは、不愉快な、味もそっけもない、むきだしの、残酷な真理であるが、それにしてもやはり、このうえなく洗練された無数の排外主義的および平和主義的な欺瞞にたいして**真理**であることが、わかった。こういう欺瞞は、くずれさってしまう。ブレスト講和は暴露されている。ブレスト講和よりいっそう悪いヴェルサイユ講和の意義とその結果は、日ましにますます容赦なく暴露されている。そして、きのうの戦争の原因を考え、また迫りくるあすの戦争のことを考える幾百万、幾千万という人々のまえには、恐ろしい真理が、ますますはっきりと、いっそう明確に、いよいよ避けがたく、たちはだかってくる。その真理とは、**ポリシェヴィキ的闘争とポリシェヴィキ革命によるよりほかには**、帝国主義戦争とそれを不可避的に生み出す帝国主義的^{ミール}世界（もしわが国に旧正字法があれば私はここで「ミール」という二つの言葉をその両方の意味で書くところだが）から抜けだすことはできない。この地獄から抜けだすことはできない、ということである。

ブルジョアジーや平和主義者たち、將軍連や小市民たち、資本家や俗物ども、敬虔なキ

リスト信者や第二インタナショナルおよび第二半インタナショナルのすべての騎士たちには、この革命を狂人のようにののしらせておくがいい。彼らが、どんな恨みごと、中傷、嘘八百を浴びせかけたところで、数百年、数千年以来はじめて奴隷たちが、公然とつぎのようなスローガンを宣言することによって、奴隷所有者間の戦争にこたえたという事実を、くもらすわけにはいかないであろう。そのスローガンとはすなわち、獲物の分配をめぐる奴隷所有者のあいだに起こっているこの戦争を、すべての国民の奴隷所有者に反対する、すべての国民の奴隷(「解放」が落ちているのか?——青山)の戦争に転化しよう、というのである。

このスローガンは、幾百年幾千年以来はじめて、漠然とした力のない期待から、はっきりしたわかりやすい政治的綱領に転化した。プロレタリアートに指導される、幾百万といういたげられた人々の能動的な闘争に転化した。プロレタリアートの最初の勝利に転化した。戦争の絶滅という事業の最初の勝利、いろいろな国民(国々か…青山)のブルジョアジーの同盟にたいするすべての国々の労働者の同盟という事業の最初の勝利に転化した。ところで、このブルジョアジーは、和睦をするのも、戦争をするのも、資本の奴隷を犠牲にし、賃金労働者を犠牲にし、農民を犠牲にし、勤労者を犠牲にしてのことである。

この最初の勝利は、**まだ最後の勝利ではない**。そしてそれは、未曾有の苦難と困難とを代償とし、前代未聞の苦悩を代償とし、われわれのしでかした多大な失敗や誤りを代償として、わが十月革命にあたえられたのである。おくれた一国民が失敗や誤りをせずに、世界中でもっとも強力な、もっともすすんだ国々の帝国主義戦争に首尾よく勝つことなど、どうしてできよう！ われわれは自分の誤りをみとめることをおそれない。そしてその誤りをどのように是正すべきかを学ぶために、それを真剣に見つめよう。だが事実は依然として事実である。すなわち、奴隷所有者間の戦争には、ありとあらゆる奴隷所有者に**反対する**奴隷の革命で「こたえ」ようという約束は、幾百年幾千年以来はじめて、**完全にはたされ**たし、……また、あらゆる困難にもかかわらず、はたされつつある。

われわれはこの事業をはじめた。いったいいつ、どれだけの期間に、どの民族のプロレタリアがこの事業を最後までやりぬくか、——それは本質的な問題ではない。本質的なことは、氷がくだかれ、行手がひらかれ、道がしめされているということである。

すべての国々の資本家諸君、その偽善をつづけたまえ！ 諸君は、アメリカにたいして日本を、日本にたいしてアメリカを、イギリスにたいしてフランスを、とといったぐあいに、それぞれの「祖国を防衛している」のだ！ 第二インタナショナルおよび第二半インタナショナルの騎士諸君、また全世界のすべての平和主義的素町人と俗物どもの諸君、帝国主義戦争に反対する闘争手段の問題にたいして、新しい「バーゼル宣言」(1912年のバーゼル宣言にならって)という「形式的回答」をつづけたまえ！ **最初のポリシェヴィキ革命**は、この地上の**最初の1億人という人間**を、帝国主義戦争から、帝国主義世界から、救いだした。つぎにくる諸革命は、こういう戦争から、こういう世界から、全人類を救いだすであろう。」注)……は本文中の略(第33巻「十月革命四周年によせて」1921年10月14日 P41~44)

このように、レーニンに迫りくる第二次世界大戦を的確に予測し、『共産主義インタナショナル第三回大会』中のドイツ、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリーおよびイタリアの代表団員との会議では、ドイツ、チェコスロヴァキア、イタリアが連携して学

び合うこと、「すぐれた模範をもつと、もっと速やかにまねる」こと、特に、ローマの労働者のおこなった「ファシスト反対闘争を組織するための大衆集会」をすぐれた模範として学ぶ必要があること指摘し、『ポーランドの共産主義者への手紙』では「ポーランドでは革命が成熟しつつある」との認識をもつとともに、「国会選挙をおこなうことが政府にとって重要であるとすれば、労働者革命と農民の不満との波が国会を征服するために、全力をかたむけなければならない。挑発にのってはいられない。果実が完全に熟するまで、革命をぜひとも育てあげなければならない。」と述べています。レーニンも冒険主義者でもないし議事を軽視しているわけでもなく、棚からぼた餅が落ちてくるように革命が起こるとも思っていないでいました。

レーニンのこの考察に、「レーニンの『帝国主義＝最後の段階』論」とか「帝国主義を『死滅しつつある資本主義』ととらえる」とかいうレッテルを貼って、内容の正しさも確認せずに、誹謗・中傷している人たちに聞きたい。

レーニンは当時の先進資本主義国が「帝国主義」国として、「戦時国家＝国家独占資本主義」の色彩を強め、資本の独占と社会的生産が強化されたことを、「社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口」といい、「死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義」と言った。あなた方が、「レーニンの『帝国主義＝最後の段階』論」とか「帝国主義を『死滅しつつある資本主義』ととらえる」とかいつているのは、このことなのか。そうであるならば、すでに見てきたとおり、曲解・捏造は明らかだ。しかし、そうでないならば、まったく別の意味で、つまり、「帝国主義が世界史的には資本主義の『最後の段階』である」という意味で「レーニンの『帝国主義＝最後の段階』論」なるものをいい、資本主義は「現在」も生き残っているのではないか、だから、レーニンは間違っていると言っているとしたら、レーニンは、あなた方に、とんでもない濡れ衣を着せられたことになる。

どのような「濡れ衣」か、見てみましょう。

レーニンは1922年5月26日、最初の発作に襲われる。同年9月7日、ほとんど健康になる。同年11月20日、レーニン最後の演説。同年12月16日、二度目の発作。1923年3月9日、三度目の発作、以降理論活動不能に。1924年1月21日、レーニン死去。

レーニンの病状の悪化とともに、スターリン(=『社会民族主義』という非難を不注意に投げつけるグルジア人)、実は「彼自身がほんとうの、真の「社会民族主義者」であるばかりか、粗暴な大ロシア人的デルジモルダ」)が、「世界史上の明日」、「呼びさまされた帝国主義抑圧下の諸民族が最後のめにめざめる日、彼らの解放をめざす断固たる、長期にわたる、困難な戦闘が始まる日」を控えて、「被抑圧民族にたいして帝国主義的な態度に陥り」、共産主義者としての原則的な誠実さと「帝国主義にたいする闘争の原則的な擁護とをまったく台なしに」し、「プロレタリア的階級連帯の利益をそこなう」行動をあらわにしはじめていた。(レーニン全集第36巻『少数民族の問題または「自治共和国化」の問題によせて』22年12月31日P715～722)

第二次世界大戦により、国家独占資本主義を鮮明にしたドイツ・日本・イタリアを中心とするグループが敗れ、真の「社会民族主義者」であり陰謀家であるスターリンをリーダーとする勢力圏と英・米連合を中心とする勢力圏がヨーロッパにつくられます。

ソ連を中心とするグループは、社会主義国家を建設することを目標とする国家群とみな

され、その強大な勢力があらわれることによって、米・英両国の支配層(資本の代理人)はこれまでの「帝国主義」路線の変更をよきなくされます。第二次世界大戦を経て資本主義諸国のリーダーとなった米国がとった戦略は、世界の資本主義体制をまもることと植民地の反乱をおさえ、それらすべてを自国の利益に結びつけることでした。そのために、ドルを増刷して、マーシャル・プランで西ヨーロッパの資本主義の復興を図り、新しい植民地政策を導入し、米国の権益を脅かすものは武力で粉砕する。「本源的蓄積」をやった資本が、「帝国主義」となって世界大戦をやり、「新しい帝国主義」として自国の権益をまもるために戦争をばらまいている。

レーニンは、確かに、当時の「帝国主義」諸国が不可避免的に戦争に突入すること、共産主義革命の国際的勝利はまちがいないこと、共産主義革命の国際的勝利なしにソヴィエト・ロシアの未来もないことを確信していました。レーニンの分析どおり「帝国主義」諸国は戦争に突入した。しかし、共産主義革命の国際的勝利はなかった。それは、レーニンの誤りなのか。そうではない。マルクスは歴史を動かす労働者階級の存在を発見した。資本の集中が進み、生産手段の集中と労働の社会化が進み、訓練され結合され組織された労働者階級が成長し、労働者階級が収奪者を収奪することを述べている。しかし、今、日本で「訓練され結合され組織された労働者階級」は成長していない。これは、マルクスの誤りなのか。そうではない。産業の空洞化によって、製造業の就業者数は減り続け、不安定雇用は増加し続け、近代経済学しか知らない人からも「資本主義の終焉」が指摘されるような現実があり、科学的社会主義の観点から事実を曝露し、ラディカルに労働者に訴えれば労働者階級がその本来の役割を發揮できる条件はある。しかし、「科学的社会主義」を自負している党が、綱領から「労働者階級」ということばの本来の意味と使命を消し去り、党员を、職場での「科学的社会主義の観点からの事実の曝露」はそっちのけで、党勢拡大と表面的な選挙運動に駆り立てている。誤りはここにある。それと同じだ。条件を生かすきれなかったことをレーニンのせいにして、自己分析を怠るのは誠実な態度とはいえない。

当時の「帝国主義」段階が、「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」が深まり、「死滅しつつある資本主義、社会主義へ移行しつつある資本主義」として労働者階級との矛盾が深まったことと、「革命近し」という情勢認識とは次元のちがうことであり、「革命近し」という情勢認識と革命が勝利するということとも同一ではない。

レーニンは 1922 年 2 月時点で、世界情勢との絡みでロシア共産党(ボ)がどのような方針をとろうとしていたか見てみよう。レーニンは 1922 年 2 月 23 日に電話で口述した「三つのインタナショナルの会議への参加についてのコミンテルン執行委員会第一回拡大総会の決議案にたいする意見をふくむロシア共産党(ボ)中央委員会政治局員への手紙」で、当時の状況をふまえて次のように述べている。

「計画中の世界のすべての労働者党の会議にコミンテルンが参加する問題について、ジノヴィエフから送ってきた決議案につきの変更をくわえるよう提案する。……」

私の提案するいちばん主要な変更点は、第二および第二半インタナショナルの指導者たちを世界ブルジョアジーの助手だと呼んでいる一節を削除することである。こういう言い方は、「がちょう」という言葉をつかうようなものである。われわれが別の場所で千度も罵倒しており、今後も罵倒するであろう卑劣漢たちを、いま一度余分に罵倒するという満足感を得るために、巨大な重要性をもつ実践的事業をぶちこわす危険をおかすというのは、

まったく分別を欠いたやり方である。統一戦線戦術はわれわれが第二および第二半インタナショナルの指導者たちを打ち倒すたすけになるのだということを理解していない人間が、いまなお拡大執行委員会の会議にいるのだとすれば、そういう連中のために、平易な講義や講演を追加してうんと聞かせてやらなければなるまい。たぶん、彼らのためにとくに平易な小冊子を書き、たとえばフランス人がまだマルクス主義的戦術をのみこんでいないようなら、それをフランス語で出版することが必要であろう。最後に、あしたになればその小児病がなおるにきまっている数人の政治的幼児のために、重要な実践的事業をだいなしにする危険をおかすよりは、この決議を全員一致ではなく、多数決によって採択するほうがましである（反対投票者には、われわれはあとで特別の、詳細な常識教育をほどこすことにしよう。」注）……………は青山の略(全集第42巻『三つのインタナショナルの会議への参加についての手紙』P553～554)

レーニンがこのような提案をしたのはなぜか、1922年2月24日執筆の「ジェノヴァにおけるソヴェト代表団の任務についてのロシア共産党(ボ)中央委員会の決定草案」でみてみよう。

「政治局員だけの回覧のために中央委員会の決定草案

一 中央委員会は、情勢と任務（ジェノヴァにおけるわれわれの代表団の）について同志リトヴィーノフのテーゼにあたえられている評価を正しいものとみとめる。

……………

五 われわれが自分のプログラムを説明するのを、ブルジョアが妨げようと試みる可能性があることを考慮して、最初の演説のさいにこのプログラムを説明しないまでも叙述あるいは指摘し、あるいはせめてその大要を示すこと（そして、すぐあとで、もっと詳しいかたちで公表すること）に、全力をそそがなければならない。

六 われわれのプログラムは、われわれの共産主義的見解を隠しはしないが、それをもっとも一般的に、簡潔に指摘するにとどめて（たとえば、副文章のかたちで）、つぎのように率直に言明することにある。すなわち、ここでわれわれの見解を説くのは不適當だとわれわれは考えている。なぜなら、われわれがここへやってきたのは、通商協定を結び、他の（ブルジョア的）陣営の平和主義的部分と協定に達するよう試みるためだからである、と。

われわれが他の陣営の平和主義的部分（あるいは、別の、とくに選んだ丁重な呼び方）とみなし、またそう呼ばなければならないのは、第二インタナショナルや第二半インタナショナル型の、それについてはケインズ型等々の、小ブルジョア的な平和主義的および半平和主義的民主主義派である。

ブルジョア陣営のこの一翼を彼らの陣営全体から区別すること、この一翼の機嫌をとるようにつとめること、彼らとの通商協定ばかりでなく、政治的協定もまた、われわれの見地からみて許されるし、のぞましいと言明すること（資本主義が新しい制度へ平和的に進化していく少数の可能性の一つとして。共産主義者としてのわれわれは、こういう可能性をたいして信じてはいないが、その試みを援助することには賛成であり、また一強国の代表者として、自分に敵対的な他の大多数の強国に対抗して、それを援助することが自分の義務だと考えている）、これが、ジェノヴァにおけるわれわれのもっとも主要な政治的任務といわないまでも、主要な政治的任務の一つである。

ブルジョアジーの平和主義的な一翼を強化し、この一翼が選挙で勝利する可能性をすこしでも増大させるために、可能なことはなんでもやり、不可能なことでもあれこれとやること——これが第一である。第二には、ジェノヴァでわれわれに対抗して団結しているブルジョア諸国を離間すること——これが、ジェノヴァにおけるわれわれの二重の政治的任務である。共産主義的見解を説明することが任務ではけっしてないのである。

七 ………

レーニン」

注) ………は青山の略(第 42 卷『ジェノヴァにおけるソヴェト代表団の任務についての決定草案』P555～557)

このように、レーニンは「帝国主義」を純経済的な意味で「死滅しつつある資本主義」と捉えていても、ノー天気「革命近し」などとは考えていなかった。「資本主義が新しい制度へ平和的に進化していく」可能性が少しでもあるならば、「ブルジョアジーの平和主義的な一翼を強化し、この一翼が選挙で勝利する可能性をすこしでも増大させるために、可能なことはなんでもやり、不可能なことでもあれこれとやる」ことを「主要な政治的任務の一つである」と考えていた。

「レーニンの『帝国主義＝最後の段階』論」とか「帝国主義を『死滅しつつある資本主義』ととらえること」というレッテルを貼ることでレーニンの考察を歪曲・捏造するのは、自ら弁証法的な認識方法も正しい歴史認識も持ちあわせていないことを曝露するものである。科学的社会主義にとって「無知は有害」だ。

余談だが、スターリンに踊らされて、「全般的危機」論に踊ったことや、不破さんが『資本論』のトンチンカンな勉強をして、21 世紀になってから、「資本主義が発達し、最後の一人まで民主主義的文化と組織性があたえられている国では、準備もなしに革命をはじめめることは、まちがいであり、ばかげている」ことを大発見し、革命観が変わった(それまでどんな革命観を持っていたのか不安のかぎりだが)たり、何か新しい発見や反省すべきことができると、その都度名前を出されて、責任の一端があるかのように言われたのでは、レーニンもいい迷惑だと思う。

なお、このページに関して、より一層理解していただくためにも、前出の HP4-13「☆レーニンの資本主義観、社会主義経済建設の取り組み、革命論への、反共三文文筆家のような歪曲と嘲笑、これでもコミュニストか」を、是非、参照して下さい。

ここから〈4-22-2〉ページ

③独占と計画性について(P20、25、26)のトンチンカンな独り相撲

石川先生は P25 で、「『無政府性』から『計画性』への変化をもって資本主義発展の段階をとらえるという、レーニンの基本見地」と、レーニンが資本主義の発展段階を「無政府性」(個別資本のなのか、国家のなのか、社会のなのか不明だが)が無くなって「計画性」が増していく過程と見ていると独断したうえで、この「基本見地ははたして適切なのか」と、独り相撲を取りはじめます。

石川先生は P26-7 で、レーニンの「独占の内容」として二つの「計画性」なるものをあげ、「独占(計画性)」として「独占」を「計画性」なるものに矮小化したうえで、「レーニンは、なぜ、他のどの基準でもなく資本間の変化を物差しに、資本主義の発展や

段階をはかろうとするのか」と「幼稚」な質問をし、『帝国主義論』の3カ所の一部(全集第22巻 P235-6、306-7、346)を抜粋して、そこでレーニンは「独占すなわち過渡期」といっているが証明がないと、独り相撲を取ります。石川先生は、後で出てくる「直感」などに頼らず、資本主義の発展を正面から見つめ、先生の言う「資本間の変化」のもつ意味を、不破さんではなくマルクス・エンゲルスの力を借りて、多面的に勉強すべきでした。そうすれば、「幼稚」の意味も「独り相撲」の意味もすぐわかります。

石川先生はレーニン全集第22巻 P236の7行目を抜粋して、「独占資本主義は社会主義への過渡にあたる段階なのだ」という結論が理解できないと、理解できないことを誇っています。大学の先生が理解できないのだから、党員のなかには理解できない人がまだいるかもしれませんので、レーニンが全集第22巻 P235-6で何を言っているのか、簡単に説明します。

マルクスは『資本論』で、小経営は資本主義的私的所有によって駆逐され、諸資本の集中がおこなわれ、「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(大月『資本論』② P993~996)と述べています。

これをふまえて、レーニンは言う。

当時の「帝国主義的段階」の資本主義が、小さな個別資本の完全な自由競争から巨大な独占資本が支配する時代に移り、その結果、「生産の社会化」が著しく前進し、資源も技術も労働者も生産も彼ら巨大な独占資本が支配するようになった。そのことによって、資本主義は「生産の全面的な社会化にぴったりと接近する」ようになった。このように「生産は社会的になるが、取得は依然として私的である。社会的生産手段は、依然として少数の人々の私的所有である。…(略青山)…そして、少数の独占者のその他の住民にたいする抑圧は、いままでより百倍も重く、苦しく、耐えがたいもの」になると。つまり、レーニンは、「生産の全面的な社会化」にぴったりと接近した「独占資本主義」は、ほんとうの意味で「生産の社会化」を豊かに発展させ、生産力を飛躍的に高めるうえでの「桎梏」であるところの、少数の独占者が支配する、「私的資本主義的取得形態」をもった経済体制であり、それは、経済的には「社会主義への過渡期」であるということを明確に述べています。このレーニンの考えは上記の『資本論』のマルクス・エンゲルスの考えと寸分の違いありません。

そして、つぎの「全集第22巻 P306-7」からの抜粋でも、同様な理由で、「独占は、資本主義からより高度の制度への過渡期である」ことを述べています。最後の抜粋「全集第22巻 P346」は、「帝国主義の歴史的地位」という章の導入部分ですが、「すでに見たように、帝国主義は、…」と「帝国主義」の簡単な定義の復習とその説明の一部です。この章のポイントも「独占資本主義」による「生産の社会化」の進展とそれにふさわしくなくなっている外皮、つまり、「私経済的關係と私的所有者の關係」(資本主義的生産關係)の除去の不可避的についての記述、つまり、「独占資本主義は社会主義への過渡にあたる段階」であることの説明です。

しかし、残念ながら、石川先生には、これらの文章がもつ大切な意味が理解できなくなっているために、文字は見えても、文章を「説明」として見ることができなくなってしまう

いました。だから、「証明」がない、となってしまうのです。石川先生がこのように意味を正しく理解できなくなってしまったのにはそれなりの理由があります。それは、どのような経緯かはわかりませんが、石川先生も、残念ながら、不破さんのマルクスの歪曲とエンゲルス、レーニンへの誹謗中傷の影響をうけて、大学教授でありながら「幼児」期の「マルクス主義者」に、退化してしまったためです。これが、レーニンは「独占すなわち過渡期」といっているが証明がないと、独り相撲を取る原因です。

マルクスは資本主義的生産の矛盾について次の二つの矛盾を述べています。一つは資本主義生産に内在する矛盾(=資本主義的生産には「剰余価値が生産される諸条件とそれが実現される諸条件とのあいだの矛盾」があること)で「基本的矛盾」(『資本論』第3巻 大月版④ P306-7 及び『剰余価値学説史』Ⅲレキシコン⑦-[137]P251 参照)といい、もう一つは分配関係・生産関係と社会的生産力とのあいだの矛盾と対立で、エンゲルスのいう「根本矛盾」(『資本論』第3巻 大月版⑤ P1129)です。この「根本矛盾」が「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」であるからこそ、資本主義的生産様式は社会的生産力発展の「桎梏」となるのです。(詳しくは、HP4-9「☆不破さんは「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」という形で資本主義の矛盾をとらえることは誤りだと、マルクス・エンゲルス・レーニンを否定する。」を参照して下さい。)

しかし、不破さんは、20世紀から21世紀にかけて約10年間かけてマルクスを歪曲する手がかりを発見し、はじめに、「根本矛盾」(不破氏は「基本矛盾」といっている)はエンゲルスが言っていることで誤りだといい、その重要な意味を消し去るための努力をします。自分の謬論を幹部党員に吹き込むための「理論活動教室」第2講「マルクスの読み方」③(2014年9月9日に行われた)で、「独占資本は、それとともに開花しそのもとの開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(大月版『資本論』② P995F6-9)という文章を二つに分け、「桎梏になる」に続けて持論を展開し、もとの文章の明確な意味を曖昧にし、不破氏の「持論」がマルクスの意図に沿った正しいものであるかのような創作をしたこのことは、前にも述べましたが、不破さんのマルクス主義者「幼稚化計画」は観念的な党活動とともに長い年月をかけて進行します。

取得の私的資本主義的形態が生産の社会的性格・社会的生産力発展の「桎梏」となることを否定する不破さんは、マルクス主義者「幼稚化計画」の一層の推進に励みます。もう、不破さんの独壇場です。不破さんは、エンゲルスもレーニンも配分方法のみを問題にし「夢」がないと言い、マルクスは労働時間の短縮による「自由の国」を未来社会として描いたと言う。資本主義的生産様式の要である私的資本主義的取得を変革することを「夢がない」と否定し、日本共産党の綱領から労働者階級の歴史的使命を取り除いてしまいます。しかし、『資本論』(大月版⑤ P1050B3-1051B6)と『空想から科学へ』(P71-72、75)を読めば分かります。 「自由の国」とは「自己目的として認められる人間の力の発展が」保障される国、「ただ物質的に十分にみち足りており、日に日にますます豊かになっていくだけでなく、肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障するような生活を、社会的生産によってすべての社会の成員にたいして確保」された国のことで、「それはただかの必然性の国をその基礎としてその上のみ花を開くことができ」る、資本主義的生

産様式を変革して、社会主義の過渡期をへて実現される社会の事です。(詳しくは HP4-16 「☆不破さんは、エンゲルスには「過渡期論」が無いと言い、『国家と革命』と『空想から科学へ』は「マルクスの未来社会像の核心」を欠いていると誹謗・中傷する。」及び 4-20 「社会変革の主体的条件を探究する」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった。」を参照して下さい。)

つぎに、不破さんは、資本主義生産に内在する矛盾、「基本的矛盾」から「利潤第一主義」だけを取り出し、「利潤第一主義」にもとづく資本主義の弊害を全て「桎梏」だといひ、資本主義的生産様式が生産の社会的性格の深化・生産力の発展の「桎梏」になることを私たちの視野から外させようとしています。

その結果、社会的生産諸力を一層発展させるためには社会主義的生産様式の社会が実現されなければならないという科学的社会主義の思想は脇におかれ(実質上放棄され)て、「利潤第一主義」の改善が目的となり、「利潤第一主義」を遠因とする「地球温暖化」等ありとあらゆる未解決課題が資本主義社会の「桎梏」であるとされる。「利潤第一主義」を解消させるべく、「ルールある資本主義」づくりが大目標となり、どれだけ日本が「民主的」になったかが重要な指標となります。資本主義的生産様式が続くかぎり不可能なこと、資本主義国にユートピア(無いものねだり)を求めます。科学的社会主義者が空想的社会主義者、一般民主主義者へとどんどん若返って、ますます「幼稚」化していきます。

そして不破さんは、マルクスが 1865 年以前は「恐慌＝革命」説なる幼稚な革命観・資本主義観をもっていたとマルクスに濡れ衣を着せ、マルクスの経済学をだいなしにします。不破さんは、マルクスの恐慌論から、「恐慌を資本の現象的な流通形態から説明した」ものだけを取り出し、本質を忘れ、そのなかの生産と販売の分離による産業資本の価値「実現」の短縮、「価値実現を前提としない貨幣資本の取得とその再投資」による「架空の需要」を恐慌の原因とみる「恐慌の運動論」なるものを創作し、マルクス経済学をすて去ります。剰余価値の発見によって証明された「利潤率の傾向的低下の法則」は、日本における「資本主義的生産の役割の終了」を国民に曝露し説明するための、ブルジョア経済学者も認める、重要な武器ですが、不破さんは、自ら作り上げた『「恐慌＝革命」説』とともに「利潤率の傾向的低下の法則」の持つ意味を葬り去ってしまいます。

不破さんは、「リーマン・ショック」に関して、事実合わない狭い一面的な「架空の需要＝恐慌」説から「過剰生産恐慌と金融危機の結合」という、もっともらしい、観念論的で抽象的な結論を引き出しています。そこには、先進資本主義諸国での「資本」の過剰と「産業の空洞化」、世界的なマネーの過剰のもとでの金融資本によるペテン的な資産の水増しと購買力の創出など、今日の資本主義がまったく眼中にありません。現代の経済現象から、資本とマネーの行動原理とその国民経済への影響から、党员・国民の目をそらさせ、現代の資本主義の構造問題を資本とマネーの「現象的な流通」問題、単なる現象形態に矮小化することによって、マルクスの経済学を破壊しています。その結果、生産の社会的性格の発展を妨げる資本主義的生産様式が今の日本をどのような状態にしているのか、資本主義的生産様式の矛盾がどう現れているのかをリアルに掴むことが妨げられ、産業の空洞化のもつ深刻な意味が理解できず、マルクスの言う、労賃が増加すれば恐慌がなくなると考える「健全で『単純な』(!)常識の騎士たち」への転落の道へ党员を導き、国民に正しい変革の方向を提起できなくしています。不破さんは、「利潤第

一主義」が今の資本主義のもとで「資本」にどんな行動をとらせるのかも、それが国民生活にどんな影響を及ぼすのかも曝露せず、「資本」の資本主義的生産様式のもとでの私的所有による国民無視の身勝手な行動を制限しないかぎり、今の日本の「危機」の解決はないことなどいっさい語りません。

不破さんは、「資本主義社会では利潤第一主義が経済発展の最大の推進力ですが、未来社会では、こうして、人間の能力の発達为社会発展の最大の推進力になってゆくでしょう」と言う。資本主義社会での経済発展の推進力は資本主義的生産様式です。抽象的・超歴史的な「利潤第一主義」などではありません。そして、社会主義社会での社会発展の最大の推進力は、社会的生産の一層の発展と取得の社会的性格の深化、人類全体の真の利益と個人の利益の統一だ。その実践のなかで新しい民主主義と新しい民主的に豊かになった人間がつけられていきます。「自由な時間」が「自由の国」だという不破さんの創作は、「未来社会では発展の推進力が上部構造に移ってゆきます」という思想(空想)に発展し、党员を唯物論から完全に解放してしまいます。(「リーマン・ショック」、「自由な時間」等、この項について詳しい説明は HP4-19「[不破さんは、マルクスが 1865 年に革命観・資本主義観の大転換をしたという、レーニンも気づかなかった大発見を 21 世紀になっておこない、マルクスの経済学をだいなしにしてしまった](#)」及び 4-20「[社会変革の主体的条件を探究する](#)」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった」を参照して下さい。)

石川先生は、残念ながら、不破哲三氏のこのような「思想」の影響をうけて、資本主義の体制的矛盾、資本主義の「根本矛盾」が見えなくなってしまったのではないかと思います。しかし、石川先生にはまだかすかな希望はあります。それは、「極楛」に関しては、不破さんの「ジャクフク」に屈していませんから。

④「最後の段階」規定が先にあり、「独占」段階論は後になって発見したという、レーニンの人格をゼロに低める暴論(P27)

「独占段階への移行によって資本主義が未来社会への過渡期に入った」ことの純経済的な意味が理解できない石川先生は、レーニンは「帝国主義戦争の時代は資本主義の『終わりの時代』だ」という、ある種の先入見(事実に基づかない妄想)をもって、「それを理論的に根拠づける『独占』段階論が後になって発見され」たと述べています。

いきなり余談ですが、石川先生は、レーニンが「資本主義の『終わりの時代』」を「理論的に根拠づける」ために後から発見した『独占』段階論を使っていると言っています。しかし、そもそも先生は、なぜレーニンは説明もなしに「独占段階への移行によって資本主義が未来社会への過渡期に入った」と言ってるのかと疑問を呈していたはずですが。それが今度は、「『独占』段階論」が後から発見され、それであとづけたと言う。先生が知りたかったのは、「独占段階への移行によって資本主義が未来社会への過渡期に入った」ということだったはずですが。先生は、レーニンを不破さんなみの観念論者に仕立てようとして自分がなにを言っているのかわからなくなってしまったのでしょうか。

このように、ここに書かれた石川先生の文章は、「独占段階への移行によって資本主義が未来社会への過渡期に入った」ことを先生なりに解明しようとしたものではなく、①レーニンは「帝国主義戦争の時代は資本主義の『終わりの時代』だ」という「事実に基づかな

い妄想をもって革命運動をしていた、②レーニンが妄想にもとづく結論を正当化するために後から根拠を発見する、これがレーニンの理論の作り方だ、レーニンとはそういう人間だ、ということをも主張するためのものです。

「独占段階への移行によって資本主義が未来社会への過渡期に入った」ことに関する説明は「③独占と計画性について(P20、25、26)のトンチンカンな独り相撲」で詳しく行っていますので、石川先生の言う「レーニンの理論史」なるものについて見てみたいと思います。

レーニンが23歳の青年のとき、1893年秋に執筆した、「いわゆる市場問題について」(全集第一巻)にも、すでに、『資本論』からの引用が多数ありますが、1896年1月、「労働者階級解放闘争同盟」事件で逮捕されてまもなく、牢獄のなかで、研究・著作にとりかかり、三年以上を費した『ロシアにおける資本主義の発展』(全集第三巻)では、すでに『資本論』を読みこなしていたことがその引用等から十分に明らかです。

当時の著作等でレーニンが「独占」や「桎梏」や「収奪者の収奪」に触れなかったのは、当時のロシアの発展状況と理論闘争の状況にあります。当時の論争の焦点は、大雑把に言えば、資本主義の「桎梏」の問題ではなく、資本主義のそもそも論、「発展(実現論)と矛盾の捉え方」の問題でした。だから、『資本論』第一巻 第2分冊の「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(大月版『資本論』② P995F6-9)という文章を知らなかったからでも、その意味を理解していなかったからでもありません。

参考に、当時の代表的な思想闘争の一つ、「資本主義の矛盾の捉え方」に係る文章をお示して、レーニンの理論水準の高さをご理解いただきたいと思います。

「ところで、資本主義社会における蓄積と生産物の実現との科学的分析は、この理論のすべての根拠をくつがえして、恐慌に先行する時期にこそ労働者の消費が高まるということ、不十分な消費(恐慌を説明するかのように言われている)は、種々さまざまの経済制度のもとで存在していたが、恐慌は、ただ一つの制度——資本主義制度だけの特殊な標識をなすということをしめした。この理論は、恐慌を他の矛盾によって、すなわち生産(資本主義によって社会化された)の社会的性格と取得の私的な、個人的な様式との矛盾によって説明するのである。これら二つの理論の深刻な差異は、自明であろう。しかし、われわれは、その差異をより詳しく論じなければならない。なぜなら、まさしくロシアにおけるシスモンディの追隨者たちが、この差異を抹殺して事態を混乱させようとつとめているからである。われわれがいまかたっている二つの恐慌理論は、恐慌にたいしてまったく異なった説明をあたえている。第一の理論は、恐慌を生産と労働者階級の消費との矛盾によって、説明する。ところが第二の理論は、生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾によって、説明する。したがって、第一の理論は、現象の根源を生産の外部に見るが(そこで、たとえばシスモンディは、古典学派の人々が生産だけに注意をむけて消費を無視しているといつて、彼らを全般的に非難する)、第二の理論は、まさに生産の諸条件のうち、その根源を見る。簡単にいえば、第一の理論は、恐慌を不十分な消費(Unterkonsumption)

によって説明するのにたいし、第二の理論は、それを（は）生産の無秩序によって説明するのである。このように、二つの理論とも、恐慌を経済体制そのものにおける矛盾によって説明しながら、この矛盾をしめすとなると、まったく分かれてしまうのである。そこに疑問がおこる。第二の理論は、生産と消費との矛盾という事実、不十分な消費という事実を、否定するのであろうか？ **もちろん、否定しない。**この理論は、この事実を十分にみとめている。しかしその事実を、資本主義的生産全体の一つの部門だけにかんする事実として、それにふさわしい従属的な地位をあたえるのである。この理論がおしえるところによれば、この事実は、現代の経済制度の、他の、より深刻な、基本的な矛盾によって、すなわち、生産の社会的性格と取得の私人的性格との矛盾によってひきおこされる恐慌を、説明することができないのである。だから、みずからは本質的には第一の理論を固執しながら、第二の理論の代表者たちは生産と消費との矛盾をどのように確認するのかなどと言っておまかしている人々については、なんと**言うべき**であらうか？ あきらかに、これらの人々は、二つの理論の差異の基礎を**よく考えなかった**のであり、そこで当然、第二の理論を理解しなかったのである。……………

シスモンディは言う、——恐慌は可能である。なぜなら工場主は需要を知らないから。恐慌は必然的である。なぜなら資本主義的生産においては、生産と消費との均衡はありえないから（すなわち、生産物が実現されえないから）と。エンゲルスは言う、——恐慌は可能である。なぜなら工場主は需要を知らないからである。しかし、恐慌が必然的であるのは、一般に生産物が実現されえないからでは、けっしてない。そうではない。生産物は実現されうる。恐慌が必然的であるのは、生産の集団的性格が取得の個人的性格と矛盾するようになるからである、と。……………

「生産の無政府性」、「生産の計画性の欠除」、——これらの言葉はなにをものがたっているだろうか？ それは、生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾をものがたっている。そこで、いま検討しつつあるこの経済文献を知っているすべての人に質問するが、シスモンディあるいはロードベルトゥスは、この矛盾をみとめていたであらうか？ 彼らは、この矛盾から恐慌を結論づけたであらうか？ いや、彼らは結論づけなかったし、また結論づけることもできなかった。**なぜなら、彼らのうちのどちらも、この矛盾をまったく理解していなかったからである。**資本主義の批判を、全般的な福祉とか、「自由に放任された流通」のまちがいとかいう言葉のうえに基礎づけてはならないのであって、生産関係の進化の性格のうえに基礎づけなければならない、という考えは、彼らには絶対に無縁のものであったのである。」（全集 第二巻『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』1897年3月執筆 P150~151,154~155）

百年以上も前のこの文章が、今の共産党の幹部にも、是非、読んでもらいたい文章の一つであることが非常に残念である。

マルクスのようにエンゲルスのような良き協力者がいないレーニンは、研究の成果はたたかひのなかで活用する以外になかった。レーニンは、『資本論』によって「独占資本」が「生産手段の集中と労働の社会化」を極限まで推進し、資本主義的「生産様式の桎梏になる」ことを学び、「生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾」を「資本主義の三つの矛盾」（①社会的生産と私的占有②富と貧困③都市と農村、ここから資本輸出）（全集第39巻 P206）の一つとしてみていました。だから、レーニンが、「独占」の現れであるカ

ルテルとトラストの評価について『帝国主義論ノート』で「私の従来の研究にもとづいて…」（全集第 39 巻 P161）と述べ、「独占資本主義」の研究を「帝国主義」の本格的・集中的研究よりも前からしていることを明らかにしていますが、それはまったく当然のことでした。なぜなら、マルクスもエンゲルスもレーニンも、『『独占』段階』を「資本主義の『終わりの時代』」と見ていたからです。だから、「独占」段階論と「最後の段階」規定なるものは後先のあるものではありません。しかし、残念ながら、資本主義の歴史的使命が終わったことが完全に明らかになったのは、1970 年代の初め、先進資本主義諸国の日用品の生産の伸びしろがなくなり、GDP の高い成長が見込めなくなったときでした。そしてますます残念なのは、資本主義の歴史的使命が終わっても、革命は起きず、日本は産業の空洞化が進み、社会の存続の危機に直面しつつあることです。

これらを踏まえて、石川先生がレーニン全集第 22 巻の『社会主義インターナショナルの現状と任務』と『よその旗をかかげて』で抜粋した文章について、どんな文脈で述べられたものなのか、見てみましょう。

まず、『社会主義インターナショナルの現状と任務』から引用した「この戦争は帝国主義戦争、…資本主義の終わりの時代の戦争である」は、日和見主義者が『共産党宣言』を歪曲して「祖国擁護」を正当化していることに対して、「資本主義の発生時代に正しくあてはまることを、資本主義の終わりの時代に引きうつしている」と、その誤りを指摘するための文章です。「帝国主義」の経済的本質が独占体の支配であることを証明するために書かれた文章ではありません。そのことは、むしろ、当時、言わずもがなの事実として日和見主義者も認めていることで、証明を要することでもありませんでした。

つぎに、『よその旗をかかげて』から抜粋して記述した文章は、P27下段2行目の「……描き、」以降の文章が、ページを間違えていたり、前後が逆だったりしているため、先生の元の文章構成を生かしながら補正すると相当分かりにくい文章になってしまいましたので、全面的にレーニンの原典の流れに沿って、レーニンが何を言っているのかを見ることにします。

レーニンは、「……描き、」に続き、「それは(資本主義の発展・成熟期——青山注)、新しい階級、現代民主主義派が勢力をととのえ、徐々に勢力を結集していった時代である。いまはじまったばかりの第三の時代は、ブルジョアジーを、第一の時代のあいだの封建領主と同じ『地位』においている。これは、帝国主義の時代であり、また帝国主義から生ずる帝国主義的激動の時代である」(P139) こと、そしてこの「第三の時代にも、国際的紛争は、その形からみれば、依然として第一の時代のばあいと同じ国際的紛争であるが、しかし、その社会的**内容**と階級的**内容**は、根本から変化した」(P141) ことを述べ、その後で、「全集第21巻139ページ」と誤植(?!)された、実はP141の後ろから3行目の文章が入り、それに続いて「全集第21巻141~2ページ」として抜粋された文章が続き、「まったく別の階級が、興隆する——広範な歴史的規模で——階級となったのである。」と結んでいます。

先生の抜粋から、(先生のように)うがってみると(?)、レーニンが理屈ぬきで、「最後の段階」を主張しているように見えるこの文章も、原典で見ると、実は、『社会主義インターナショナルの現状と任務』で述べていること、つまり、第三の時代は帝国主義の時代であり、第一の時代と第三の時代はまったく違うということを述べており、第一の時代はブルジョアジーが興隆する階級だったが第三の時代はプロレタリアートが興隆する階級とな

ったことを述べている文章です。この文章も、「帝国主義」の経済的本質が独占体の支配であることを証明するために書かれた文章ではありません。「帝国主義」の経済的本質が独占体の支配であることを証明するために書かれた文章ではないものが「帝国主義」の経済的本質が独占体の支配であることを証明していないというのは至極あたりまえのことだと思います。この文章のどこに誤りがあるのか。何のために抜粋したのか、まったく理解に苦しみます。万一、石川先生が読者に「うがった見方」をさせるために、原典の主旨を滅茶苦茶にして、文章を切り刻み——原子から自分の好む物質を作りだすように——『よその旗をかかげて』を利用しているのだとしたら、残念ながら石川先生は、マルクス主義者の風上、いや、風下にも置けないことになるのではないのでしょうか。

レーニンが独占資本主義の当時の特徴をもとに、当時の資本主義を「資本主義の最高の段階(=現段階、最新段階、過渡的な段階、死滅しつつある段階)としての帝国主義」といった。石川先生は「独占資本主義を分析した結果として「最後の段階」規定が生まれたのではな」と、レーニンを不破哲三氏なみの観念論者のように言い、マルクス主義者としてのレーニンの人格を否定する。しかし、石川先生はここで何を言いたいのか。当時レーニンが言ったことが正しいと思うのが思わないのか。今の日本を見て、独占資本主義を経済的に命運の尽きた、過渡的な段階と見るのか、見ないのか、現実と向き合うリアルな視点の欠落した文章であることだけは確かだ。

なお、これまで見てきたように、石川先生は、レーニンが「帝国主義戦争の時代は資本主義の『終わりの時代』だ」という、ある種の先入見(事実に基づかない妄想)をもって、「それを理論的に根拠づける『独占』段階論が後になって発見され」と述べ、レーニンの研究態度を誹謗し人格を傷つけましたが、『赤旗』紙上で自らの著作の宣伝に石川先生を起用している不破さんも、同じように、「『恐慌=革命』説を背景に、利潤率低下の法則を資本主義の『必然的没落』の表われとする断定がさきがあり、そこから恐慌の運動論が引き出せるはずだ」という思い込みが、マルクスを、こうした無理な立論に固執させた」のではないのでしょうかと、マルクスの研究態度を誹謗し人格を傷つける放言を行っています。HP4-19「☆不破さんは、マルクスが 1865 年に革命観・資本主義観の大転換をしたという、レーニンも気づかなかった大発見を、21 世紀になっておこない、マルクスの経済学をだいなしにしまった。」を参照して下さい。

大変悲しいことです。

⑤ エンゲルスは「生産の無政府性」を資本主義の矛盾と捉えたという(P28-29)

内容の検討に入るまえに、科学的社会主義の正しさを確信している者が、「計画性」と「無政府性」という言葉を使う場合、どのような理解を前提としているのかをまず確認しておきたいと思います。

私たちが、資本主義の発展によってますます「計画性」が高まると言った場合、資本主義国家にとっても個別企業にとっても、それは、資本の利益を増やすため又は損失を少なくするための「計画性」であり、生産全体の「計画性」や社会全体を豊かにするためのバランスのとれた富の配分のことではありません。しかし、資本主義のもとでの「計画性」の進歩は、科学技術の進歩として新しい共同社会で社会全体のために活用される要素を含んでおり、その意味で「進歩性」を持ち、新しい社会を引き寄せる大切な要素ということ

ができます。

「無政府性」という言葉も、個別企業どうしの競争を含む生産の「無政府性」という意味合いの場合と社会全体を豊かにするための国家の社会的富の生産の「無政府性」という意味合いの場合とがあり、文脈の中で、どのような意味合いで使用された言葉かをしっかりと読みとる必要があります。

レーニンは、前出の『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』（1897年3月執筆 全集 第二巻 P154~155）で、『生産の無政府性』、『生産の計画性の欠除』、——これらの言葉はなにをものがたっているだろうか？ それは、生産の社会的性格と取得の個人的性格との矛盾をものがたっている」と、「生産の無政府性」も「生産の計画性の欠除」も資本主義社会ではなくなること、資本主義社会は「生産の無政府性」が支配した「生産の計画性の欠除」した社会だということを明確に述べています。

これが、私たちの共通した理解であり、これを踏まえた議論をする必要があります。

石川先生は、エンゲルスが「生産関係を商品生産一般の特徴である「生産の無政府状態」（無政府性）に解消してしまう弱点をもっていました」と、資本主義の特徴としての「生産の無政府性」とそれを前提に資本主義の矛盾を曝露しているエンゲルスを歪曲しようとしています。

資本主義社会の「生産の無政府状態」の弊害は、石川先生が言うように、「商品生産一般の特徴」から起こるものではありません。資本主義社会の「生産の無政府状態」は私的資本主義的所有・私的資本主義的生産関係によって起こるのです。エンゲルスのいう「根本矛盾」——生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態との矛盾＝体制的矛盾（これは、共産党が最近まで言っていた「基本矛盾」というものですが）——から起こるのです。（なお、エンゲルスのいう「根本矛盾」に関する詳しい説明は HP4-9「不破さんは「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」という形で資本主義の矛盾をとらえることは誤りだと、マルクス・エンゲルス・レーニンを否定する」を参照して下さい。）

「競争」も「生産の無政府性」も「商品生産一般の特徴」としてありましたが、資本主義的生産様式は「競争」と「生産の無政府性」を通じて、独自の法則を貫き発展します。このことを不破哲三氏とその弟子たちは理解できずエンゲルスを誹謗中傷します。「生産の無政府性」は資本の集中と集積をすすめて、新しい社会への物質的準備をしますが「社会的性格」と激しく衝突します。なぜなら、それは体制的矛盾の現れだからです。だからこそ、エンゲルスが資本主義の矛盾を曝露するとき、「競争」と「生産の無政府性」を使って説明するのです。（なお、「競争」に関する不破さんのエンゲルスにたいする暴言については HP4-10「エンゲルスは「競争が悪の根源だ」という結論を引き出した」、「剰余価値の搾取を抜きにした資本主義論を展開した」と言う不破さんの暴言」を参照して下さい。）

石川先生、資本主義のもとでの「生産の無政府状態」が「商品生産一般の特徴」から起こると捉えているのは、マルクスの言う「基本的矛盾」から「利潤第一主義」だけを取りだして資本主義的生産様式を棄て、恐慌を「資本の現象的な流通形態から」しか捉えることができない、不破さんやあなた様たちの誤った理解です。

石川先生は『空想から科学へ』（新日本文庫P58）から文章の一部を抜粋し、エンゲルスが、「資本主義の推進力を生産関係の「無政府性」に求めていき、恐慌もこの「無政府性」から展開しています。そこには剰余価値生産を追求する資本の論理は登場してきません」

とエンゲルスが「資本の論理」抜きの「無政府性」を主張していると述べています。

しかし、「(資本主義的)生産関係の『無政府性』、資本主義的生産関係のなかでの「競争」こそが「各個の資本家に資本主義的生産様式の内在的な諸法則を外的な強制法則として押しつける」ことをマルクスも教えているのではないですか。(次の⑥の〈参考〉を参照して下さい。)
「そこには剰余価値生産を追求する資本の論理」が、はっきりと、「登場して」いるのではないですか。繰り返しになりますが、このことを不破さんとその弟子たちは理解できません。理解できない者が、賢者をバカあつかいしています。

『空想から科学へ』は、いや、今まで先生が抜粋したすべての文章に共通することですが、文脈のなかで、展開全体のなかで文章の意味をつかむことが大切です。そうした中で見解を述べるのでないと建設的な議論にはなりません。もしも、先生が『空想から科学へ』をテキストとして科学的社会主義の講義をするとしたら、このように断片を取りあげて、このような結論をだしますか。最初から「講義」していれば、「剰余価値生産を追求する」私的資本主義的取得形態が「個々の工場における生産の組織化と社会全体における生産の無政府状態」をつくり、「生産の社会的無政府状態」のもとで生産手段が資本家の手に集積され、自分の労働力以外なにももたないプロレタリアートが増大してきたことも、先生なら、『空想から科学へ』を使って、ちゃんと説明できるでしょう。なお、先生には、「剰余価値生産を追求する資本の論理」から、不破さんのように「利潤第一主義」だけを取り出して、マルクスの言う「健全で「単純な」(!)常識の騎士たち」に成りさがり、マルクス・エンゲルス・レーニンからどんどん離れていかないよう、願うばかりです。

礼を欠く言い方で申し訳ありませんが、ぜひ、「私たちの共通した理解」をもう一度読んで下さい。

⑥レーニンはエンゲルスの「資本主義」論に依拠したから誤ったという(P28-29)

石川先生は、レーニンは「資本主義の特徴を「商品生産一般」との共通性に解消」したと言います。その理由は、レーニンが、自由競争を「資本主義と商品生産一般との基本的特質」だと言ったからだという。なんでここで、「数学」の初歩の話をしなくてはならないのでしょうか?! 「自由競争は資本主義の基本的特質」だといい、「自由競争は商品生産一般の基本的特質」だというと、なぜ、「資本主義の特徴を商品生産一般との共通性に解消」したことになるのか。共通なのは「自由競争」という言葉だけで、「資本主義の特徴」全体を「商品生産一般との共通性に解消」などしていません。何次元の世界での「真理」の証明方法なのかわかりませんが、まったく「新しい」公理を石川先生は発見したようです。私の受験生当時、京大の数学は、毎年、ユニークで面白い問題が出題されていました。そんな、よい問題を出す京大を出られた石川先生が、なにがなんでも自分の妄想に合わせようとして、「数学」の初歩さえ分からなくなってしまったのでしょうか。

参考に「競争」についての私たちの共通理解も簡単に述べたい

ここでいう競争とは利潤をめあてとする競いあいのことです。資本にもとづく生産は資本の内的諸法則に適合した諸形態をとり、競争は各個の資本家に資本主義的生産様式の内在的な諸法則を外的な強制法則として押しつけます。その結果、社会的分業は独立の商

品生産者たちを互いに対立させます。

資本の蓄積と集積の過程は、もしも求心力と並んで対抗的な諸傾向が絶えず繰り返し集中排他的に作用しないならば、やがて資本主義的生産を破壊させてしまいます。それを防ぐために国家による独占と競争との共存政策の推進があります。また、資本は自分自身の発展限界を感じると、資本の発展の前提である自由競争を自ら抑制し、擬似的な計画経済によって利益をみんなに分け合うようなこともあります。このことは、資本主義の存在意義を失わせるので、国家は一般的には完全な独占を回避する政策をとります。

「競争」とはそういうもので、資本主義が悪なのであって、「競争」に資本主義の悪をなすりつけてはなりません。これが、私たちの「競争」と「独占」の共通理解であり、これを踏まえた議論をする必要があると考えます。

〈参考〉

・ **資本主義の内的諸法則は自由競争と不可分である**

「資本の内的諸法則は、自由競争が発展するかぎり、…はじめて法則として措定されるのであり、…資本にもとづく生産が自分(資本の内的諸法則)に適合した諸形態をとる。」

しかし、資本のご都合主義は自由競争の抑制をも求める。

レキシコン⑤-[70]P31 下2～33 全部 (マルクス『経済学批判要項』Ⅲ P599～602)

・ **競争は、利潤をめあてとする競いあいである**

「競争は産業上〔(生産活動上)〕の競いあいではなくて商業上の競いあいである。」

レキシコン①-[176] (『哲学の貧困』)

・ **資本主義の発展段階と競争の諸条件(資本のおかれた諸条件と競争の諸条件)**

「資本の内的諸法則——それは資本の発展の歴史的な初期段階においてはたんに傾向として現れるにすぎない——は、自由競争が発展するかぎり、またその範囲内で、はじめて法則として措定されるのであり、またそのかぎりでのみ、資本にもとづく生産が自分に適合した諸形態をとる。というのは、自由競争は資本にもとづく生産様式の自由な発展であり、資本の諸条件とこれらの諸条件をたえず再生産する過程としての資本の諸条件との自由な発展であるからである。……資本が弱いあいだは、資本そのものが、過去の、すなわち資本の出現とともに消え去りつつある、生産諸様式のささえをもとめる。自分を強力なものと感じるようになると、資本はこのささえを投げ捨て、自分自身の諸法則に従って運動する。資本が自分自身を発展の制限であると感じ意識しはじめると、資本は次のような諸形態に、すなわち、自由競争の抑制によって、資本の支配を完成するようにみえながら、同時に資本の解体の、また資本にもとづく生産様式の解体の告知者でもある諸形態に、逃げ場をもとめる。……いずれにせよ、競争を自由な個性のいわゆる絶対的な形態とみる幻想が消えさるならば、このことは、競争の諸条件、すなわち資本にもとづく生産の諸条件が、すでに制限として感じられ考えられているということ、したがってまた、すでに制限となっており、またますますそうなるということの証拠である。」

〈マルクス経済学レキシコンⅤ P31～33 マルクス『経済学批判要綱』Ⅲ、P599-602〉

・ **競争の権威と社会的生産過程のいっさいの意識的社会的な統御や規制の排除**

「、彼らは、競争という権威のほかには、すなわち彼らの相互の利害関係の圧迫が彼らに加える強制のほかには、どんな権威も認めない」〈大月版『資本論』① P466〉

・ **競争は各個の資本家に資本主義的生産様式の内在的な諸法則を外的な強制法則として**

押しつける

「競争は各個の資本家に資本主義的生産様式の内在的な諸法則を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家に自分の資本を維持するために絶えずそれを拡大することを強制するのであり、また彼はただ累進的な蓄積によってのみそれを拡大することができるのである。」〈大月版『資本論』② P772〉

・集中排除的な作用の役割

「資本の蓄積と集積の過程は、もしも求心力と並んで対抗的な諸傾向が絶えず繰り返し集中排除的に作用しないならば、やがて資本主義的生産を破壊させてしまうであろう。」〈大月版『資本論』④ P309〉

本題に戻ります

石川先生は、「国家独占資本主義を「社会主義のためのもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口」だとするレーニンの議論」とエンゲルスの「ますます大規模な社会化された生産手段」が国有化されることの意義とは「基本線では太くつながるもの」と述べています。受けとめ方に違いはあるようですが、先生と初めて理解が一致しました。「ますます大規模な社会化された生産手段」は、独占の様々な形態にしろ、社会的所有のための物質的基礎を整え、「国有」は有力な「解決の形式上の手段」の一つであり、「その手がかりを」提供するものです。違いますか!?

そして、「ますます大規模な社会化された生産手段」、「生産手段の集中と労働の社会化」が「社会主義のための物質的準備であり、社会主義の入口」であることは、マルクスもエンゲルスもレーニンも確信していたことです。

小経営は資本主義的私的所有によって駆逐され、諸資本の集中がおこなわれ、「独占資本は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏になる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(『資本論』大月版② P993 ~ 996)これは、私たちマルクス・レーニン主義者の共通した確信です。

〈参考〉社会主義を準備するということについての私たちの共通理解

資本主義の発達の中なかで、私たちが「社会主義を準備する」というような表現を用いる場合、それは社会的生産の深化、社会的生産諸力の発展、管理統制技術の進歩の中なかで社会的に必要な財の不足、資本に転化することのできない財の架空取り引き、非人間的な労働の強制、階級的利害の拡大等により、社会主義社会実現の条件がより一層発展したことを意味する表現です。社会主義は資本主義的生産様式を社会主義的生産様式に「変更」することによってはじめて実現するということは、自明のことです。

⑦マルクスの資本主義発展論について(P34~35)

石川先生は、まず、④マルクスとエンゲルスの資本主義論の違いを言い、⑤マルクスは「労働者の闘いの前進を」、「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因としてとらえました」と言い、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展は、直接には資本主義の枠内における資本主義の改良や変化を生み出すものですが、

同時に、マルクスはそれを、未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせいとしてとらえました」と述べ、㉔その根拠として『資本論』の「工場立法」に関する記述(第一巻第1分冊 大月版①P653-654)の一部を抜粋し、自らの主張に合わせてまとめています。

石川先生が『資本論』の「工場立法」に関する後述の記述を「マルクスの資本主義発展論」の「核心」と捉えたのは正しい選択でした。しかし、残念ながら、その「核心」の捉え方はマルクス・エンゲルスの捉え方とは、似て非なるものどころか、まったく違ったものでした。

以下で、上記㉔㉕㉖の順番に従って見てみましょう。

㉔マルクスの資本主義論とエンゲルスの資本主義論とは違うという

石川先生は、エンゲルスは「生産の無政府性」を資本主義の「矛盾の一方の極」としているが、マルクスは「剰余価値生産の追求」を資本主義の「矛盾の一方の極」としていると、まず例によって、マルクスとエンゲルスの資本主義論の違いを捏造します。

これは、不破さんの「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」というエンゲルスの考え——エンゲルスだけの考えではなく、マルクスの考えでもあるが——は誤りだという、師匠の珍説を超える、超珍説のようにみえる。しかし、この、一見「超珍説」にみえるこの主張は、「生産の無政府性」という言葉を「取得の資本主義的形態」に変えれば不破さんの主張と同じになる。そして、「生産の無政府性」とは「取得の資本主義的形態」が生み出す現象です。

前にも述べたとおり、マルクスもエンゲルスも「資本主義生産に内在する矛盾」と「新しい社会の形成要素と資本主義的生産様式との体制的な矛盾」の二つを資本主義の矛盾と捉えていて、マルクスとエンゲルスとのあいだに認識の違いなどありません。前者をマルクスは「基本的矛盾」といい、後者をエンゲルスは「根本矛盾」と言った。マルクスが「剰余価値生産の追求」を資本主義の「矛盾の一方の極」としているというが、これは不破さんが「資本主義生産に内在する矛盾」から「利潤第一主義」を抽出して、単純化したものでマルクスの考えではない。

それにしても、石川先生も不破さんも、どうして物事を立体的に見ることができないのだろうか。なぜ彼らは幼児なみの認識能力しか持ち合わせていないのだろうか。

詳しくは前出の HP4-9「☆不破氏は「生産の社会的性格と取得の資本主義的形態の矛盾」という形で資本主義の矛盾をとらえることは誤りだという」を参照して下さい。

㉕石川先生は「資本家」なのか、「労働貴族」なのか、「不破さんの小判鮫」なのか

石川先生は、マルクスは「労働者の闘いの前進を」、「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因としてとらえました」と言い、「こうした闘いの積み上げ(労働者の闘いの前進—青山)とそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展(ずる賢い資本による労働者の闘いの成果の掘り崩しと新たな資本蓄積のテコとしての制度利用による「より巨大な資本主義の発展」—青山)は、直接には資本主義の枠内における資本主義の改良や変化を生み出すものですが、同時に、マルクスはそれを、未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせいとしてとらえました」と述べ、その根拠として『資本論』の「工場立法」に関する後述の記述の一部を抜粋して石川先生の主張にあわせてまとめています。そして、「労働者たちが闘い取った」た、「直接には資本主義の枠内における資本主義の改良や変化を生み出すもの」の具体例として、「労働時間の短縮」や「議会制民主主義の

確立」や「経済活動における『正義の原則』の必要など」をあげています。

なお、上記の「マルクスはそれを、未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のせいとしてとらえました」の「それ」とは、「労働時間の短縮」や「議会制民主主義の確立」や「経済活動における『正義の原則』の必要など」のことだと思われます。なぜなら、石川先生は「資本主義の歴史的発展の度合いをもっとも骨太くはかる尺度は、国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているかという点におかれるように思うのです。「この直感」は「マルクスの資本主義論に近いものとなっています」と述べていますので。

こうして、石川先生の「直感」は「マルクスの資本主義論に近いもの」となるということです。

しかし、この議論のすすめ方にはいくつもの無理があります。

一番大きな、決定的な「無理」は、その根拠として石川先生が抜粋した『資本論』の「工場立法」に関する文章は、「資本主義の民主的な管理」が「資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度」などと、まったく、言っていないことです。次の項、「◎マルクスの資本主義発展論」で詳しく述べます。

次に、マルクスは、先生が主張するように、「労働者の闘いの前進」を「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因」に転化し、ずる賢い資本家のように、労働者の闘いの成果を掘り崩し新たな資本蓄積のテコとして利用することによって「より巨大な資本主義の発展」を図ろうとなど考えていませんでした。

だから、マルクスは『賃金、価格、利潤』で「超強力な社会的障害物の強要」の必要性を述べ、「このように全般的な政治活動が必要であったということこそ、たんなる経済行動のうえでは資本のほうが強いことを立証するものである」（『賃金、価格、利潤』P84）と言い、『資本論』では、工場監督官報告書の言葉を借りて、標準労働日の確定、労働時間の短縮が、労働のため以外の自分自身の目的のための時間を与え、「ある精神的なエネルギーを彼ら（労働者）に与え、このエネルギーは、ついには彼らが政治的権力を握ることになるように彼らを導いている」（第1巻P398）と述べているのです。

そして、『資本論』の「労働日」の章と『賃金、価格、利潤』は、「社会的障害物」を築く闘いについて、「もろもろの結果とたたかいはしているが、それらの結果の原因とたたかっているのではない」ことを述べ、資本の本質をしっかりと掴むこと、労働者の団結の重要性と団結した力で要求を実現することの重要性とともに、労働運動が「現存の制度の諸結果にたいするゲリラ戦だけに専念し、それと同時に現存の制度をかえようとはせず、その組織された力を労働者階級の終局的解放すなわち賃金制度の最終的廃止のためとして使うことをしないならば、それは全面的に失敗する」と、労働者の団結を組織して資本主義的な生産関係を変えることこそが、問題の真の解決の道であることを教えています。

「資本主義の民主的な管理」＝「ルールある資本主義」を求める「改良」闘争の結果実現した、石川先生が誇る、「労働時間の短縮」や「議会制民主主義の確立」や「経済活動における『正義の原則』の必要など」とは、どのようなものなのか。日本の労働者が「労働時間の短縮」の利益を享受しているのか。「議会制民主主義の確立」によって日本や米国の金権政治がなくなり、民意が反映した政治がおこなわれているのか。「経済活動にお

ける『正義の原則』によって、「人間に値する生活」が確保されているのか、金持ちの子は金持ちになり貧乏人は貧乏人になる社会が変わったのか。これが現実です。

だから、マルクスは「ゲリラ戦だけに専念」してはだめだ、「その組織された力を労働者階級の終局的解放すなわち賃金制度の最終的廃止のためのこととして使う」ことをしないならば「全面的に失敗する」と言っているのです。

しかし、肝心のこの点を不破さんたちは強調せず、曖昧にします。「労働者階級の終局的解放」を訴えることを忘れた不破さんは、「社会的障害物」を築く闘いについて、「資本主義の側から見ても、その実現は、労働者階級の衰退などの社会的破局を防止して、経済の安定的発展を支える積極的作用をはたしたのです。その意味では、そこには、“資本主義の知恵”の発揮があった、と見ることもできます」と言います。

これはもう、「資本家」か「労働貴族」の言い分です。

石川先生は、マルクスは「労働者の闘いの前進を」、「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因と」とらえたと言い、マルクスがこの「資本主義の改良や変化」を「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件の形成としてとらえました」とマルクスの思想を「改良」闘争に矮小化し、歪曲します。類は友を呼ぶとはこのことです。

このように、「労働者階級の終局的解放」を「改良」と同時に訴えることを忘れてしまった石川先生たちの文章からは、「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件の形成」(＝「ルールある資本主義」の実現)という言葉は見ることができても、マルクスが常にそうしたように、現代日本の資本主義の矛盾を根本から曝露し、“新しい歴史を創る主体の形成”の促す言葉を発見することができません。

ここが不破さんや石川先生たちとマルクス・エンゲルス・レーニンとの決定的に異なる点です。こういう人が、マルクスの資本主義論とエンゲルスの資本主義論とは違うという。確かに、彼らのいう「マルクスの資本主義論」とマルクス・エンゲルス・レーニンの「資本主義論」とには雲泥の差がある。石川先生が、そのことを私たちに分からせてくれたのはよいことですが、科学的社会主義の思想を否定するのなら、もっと正直におこなうべきでないでしょうか。

詳しくは HP4-1「☆不破さんは、『賃金、価格、利潤』の賃金論を「『ルールある経済社会』へ道を開いてゆく」闘いに解消し、『賃金、価格、利潤』を労働運動にとって何の意味もないガラクタの一つに変えてしまった。」及び 4-2「☆不破さんが言うように、「社会的バリケード」をかちとり「ルールある経済社会」へ道を開いてゆくことこそが、資本主義社会を健全な経済的発展の軌道に乗せる道だなどと、マルクスは一度も述べたことはない。」を参照して下さい。

◎マルクスの資本主義発展論について

私は、⑥で「この議論のすすめ方にはいくつもの無理があります。一番大きな、決定的な「無理」は、その根拠として石川先生が抜粋した『資本論』の「工場立法」に関する文章は、「資本主義の民主的な管理」が「資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度」などと、まったく、言っていないことです。次の項、「◎マルクスの資本主義発展論」で詳しく述べます」と言いました。

まず、石川先生が「工場立法」に関する文章から、どのような抜粋をしているのか、見てみましょう。

『工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対関係を、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる。』（『資本論』新日本新書版 864 ページ）というわけです。『物質的諸条件および社会的結合』が『新しい社会の形成要素』に、深まる『矛盾』と『敵対』が『古い社会の変革契機』になるといいます。と石川先生は言う。

石川先生たちが夢みる「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件的形成」（＝「ルールある資本主義」の実現）が「新しい社会の形成要素」でもあるかのような印象を読者に与えながら、『資本論』から上記のような抜粋をおこない、続けて、「労働時間の短縮」等の「ルールある資本主義」の実現が「新しい社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」とをますます成熟させるという。

不破さんは独自の「桎梏」論を創作するために、『資本論』の文章を二つに分け、その間に自説を入れたが、石川先生は自説を二つに分け、その間に『資本論』を入れる。不破さんが使ったトリックに似ているといえれば似ている。弟子として、不破さんが使ったトリックを応用したということなのだろうか。

石川先生が抜粋した箇所ではマルクスは何をいっているのか、マルクスの言わんとすることを正しく理解していただくために、石川先生の三行半の引用ではなく、もう少し長い引用がどうしても必要になる。私のホームページがどうしても長くなってしまうのは、マルクス・エンゲルス・レーニンの原典を歪めずに理解を求めためであり、周辺情報も是非とも知ってもらいたいためですので、お許し願いたい。

マルクスは言う。

「労働者階級の肉体的精神的保護手段として工場立法の一般化が不可避になってきたとすれば、それはまた他方では、すでに示唆したように、矮小規模の分散的な労働過程から大きな社会的規模の結合された労働過程への転化を、したがって資本の集積と工場制度の単独支配とを、一般化し促進する。**工場立法の一般化は、資本の支配をなお部分的におおひ隠している古風な形態や過渡形態をことごとく破壊して、その代わりに資本の直接のむき出しの支配をもってくる。したがってまた、それはこの支配にたいする直接の闘争をも一般化する。それは、個々の作業場では均等性、合則性、秩序、節約を強要するが、他方では、労働日の制限と規制とが技術に加える非常な刺激によって、全体としての資本主義的生産の無政府性と破局、労働の強度、機械と労働者との競争を増大させる。それは、小経営や家内労働の諸部面を破壊するとともに、「過剰人口」の最後の逃げ場を、したがってまた社会機構全体の従来の安全弁をも破壊する。それは、生産過程の物質的諸条件および社会的結合を成熟させるとともに、生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係を（成熟させ——青山加筆）、したがってまた同時に新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる。」（『資本論』第一巻第1分冊 大月版①P653-654）と。**

④でエンゲルスの謬論として否定した「資本主義的生産の無政府性と破局」、石川先生たちにとっては厭なことばが出てきましたね。いいんです。引用しなければ読者には分かりはしないんだから。そう思って石川先生はこの文章の最後のセンテンス、「工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対とを、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」（『資本論』新日本新書版 864ページ）だけを「抜粋」したんでしょうか。

この最後のセンテンスに関しては大月版のほうが分かりやすいですね。新日本新書版は、石川先生たちのために、わざと分かり難くしたわけではないと思いますが。

ここでマルクスが言っていることは明確です。

その要旨は次のとおりです。

工場立法の一般化によって、生産の社会化の進展と資本の集積と工業全体の資本主義化を一般化し、労資の直接の闘争をも一般化する。個々の作業場では均等性、合則性、秩序、節約を強要するが、それは同時に、全体としての資本主義的生産の無政府性と破局、労働の強度、機械と労働者との競争を増大させ、小経営や家内労働の諸部面を破壊することによって、社会機構全体の従来の安全弁をも破壊する。資本の集積と工業全体の資本主義化の結果、社会的生産諸力と社会的結合が高まるとともに、全体としての資本主義的生産の無政府性もあきらかになり階級闘争も激化する。それは、社会的生産諸力と社会的生産を「新たな社会の形成要素」として発展させ、私的資本主義的生産による「生産の無政府性」とその「破局」の現れである恐慌や労働条件の悪化等の矛盾が明らかになり、労資の敵対も鮮明になり、それらが「古い社会の変革契機」として労働者階級の運動の前進のための、資本主義社会を社会主義社会に変えるためのエネルギーを高めてゆく。

富の所有の私的資本主義的性格があるから、「全体としての資本主義的生産の無政府性」があり、同時にそれが、社会的生産諸力の発展の「桎梏」になっているのです。人間の生活を全面的に支え豊かにする社会的生産を実現するためには、取得の私的資本主義的形態を社会主義的形態に変えなければなりません。マルクスはその条件が日々整いつつあることを、「工場立法の一般化」の意義として述べているのです。

このマルクスの資本主義論はエンゲルスの資本主義論と完全に一致しています。

そして、この文章は『資本論』の第一巻の文章ですから、エンゲルスが勝手に補筆したなどと不破さんにクレームを付けられて「共産党」から抹殺されることはありません。だから、不破さんを信じ、古典を不破さんを通じてのみ学び、『赤旗』の不破さんの書籍の宣伝に不破さんの素晴らしさを寄せる人、そして、それを載せる人、すべての不破さんのファンのみなさん、安心して読み下さい。

さて、ここでもう一度、石川先生の抜粋した文章を見てみましょう。

「『工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本主義的形態の諸矛盾と諸敵対関係とを、それゆえ同時に、新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる。』（『資本論』新日本新書版 864 ページ）というわけです。『物質的諸条件および社会的結合』が『新しい社会の形成要素』に、深まる『矛盾』と『敵対』が『古い社会の変革契機』になるというのです。」と先生は言う。

この石川先生の文章のミソというか、“too sekoi”のところは、「生産過程の資本主義的形態の諸矛盾」を「深まる『矛盾』」と言い換え、「生産過程の資本主義的形態の諸敵対関係」を「深まる『敵対』」と言い換えたところにあります。

「工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合を成熟させるとともに、生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係とを（成熟させ——青山加筆）、したがってまた同時に新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」という文章も、『資本論』の“桎梏”に関する文章を不破さんがやったようにではなく、素直に読めば、いいんです。わざわざ抽象的な「矛盾」や「敵対」をもちだして、読者を混乱させること

はないんです。

つまり、資本主義の発展は、「生産過程の物質的諸条件および社会的結合」、つまり、「社会的生産諸力と社会的生産」を「新たな社会の形成要素」として、「生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係」、つまり、「私的資本主義的生産による生産の無政府性＝生産の社会的性格と資本の私的資本主義的性格の矛盾と労資の敵対関係」を「古い社会の変革契機」として成熟させることを述べているのです。

この「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」がどれだけ深化したかが、資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度なのです。「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」は、資本主義が「国民の新しい共同社会、(社会主義社会)にむかってどれだけ前進したかの度合いをはかる尺度です。

だから、資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度は「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」だと言う石川先生の「直感」は、論理に誤りがあります。「ルールある資本主義」は、社会のイニシアティブを労働者階級が握っていないかぎり、より矛盾が深化した形で、資本にとっては新たな搾取強化の手段となり、労働者階級にとっては新たな闘いの出発点となるだけです。

石川先生は、資本主義は「死滅」しないで「巨大な発展を遂げた」から、レーニンとは間違っているという。不破さんは、マルクスとエンゲルスは「恐慌」で革命が起きると思っていたが、革命が起きなかったから間違いだという。こういうことをいう人たちが、パリコミュンから何を学び、パリコミュンをどう評価しているのか、本音を聞いてみたい。

マルクスとエンゲルスが生きた時代のイングランド銀行の金融政策は、「恐慌」に火に油を注ぐようなものだった。「恐慌」が社会変革の唯一ではないが「一つの」社会変革の契機、それも当時最も有力な契機であったことは間違いない。だから、当時、マルクスもエンゲルスも「恐慌が政治的変革の最も強力な槓杆のひとつである」と考えていた。これは、間違いではない。

また、レーニンが体験した第一次世界大戦の前後、そして第二次世界大戦へ向かいつつあるとき、当時レーニンが研究し『帝国主義論』等にまとめられた成果は事実を反映しており、基本的に正しい。当時の資本主義を「死滅しつつある」ものと捉えたことも間違っていない。第一次世界大戦後、ドイツで革命は起きなかった。ソヴィエトロシアが生き残り、第二次世界大戦ではファシストが勝利しなかった。第二次世界大戦をソヴィエトロシアの力を借りて勝利した米英が資本主義の危機を意識してヨーロッパ諸国を援助した。その結果、「死滅しつつある」資本主義は死滅しなかった。そのことをもって、当時、レーニンが資本主義を「死滅しつつある」と捉えたことを間違いだというのは、歴史を理解しないものだ。

そして、私たちが、70年代のはじめ以降資本主義は黄昏時に入り、産業の空洞化が急速に進む今日の日本の資本主義を「死滅しつつある」ものと捉えるのは、間違いではないと、私は確信している。日本でのグローバル資本の行動を「民主的に管理する」ことの中核課題が「産業の空洞化」をやめさせ、厚みをもった経済構造の構築と「富」の社会福祉分野への再配分を図ることであることは、最近の、イギリスのEU離脱や製造業復活を訴える米国のトランプ氏やサンダース氏への支持の高まりからも、その正しさは明らかである。

なお関連して、「②「全般的危機」論の克服と帝国主義論の発展にかんして」の項も参

照して下さい。

II 資本主義の発展・成熟度をとらえる基準とは

①石川先生は、「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」が資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度だと「直感」でいう。

石川先生は、この「直感」を正当化するために、レーニンの思想を歴史の中で、文脈全体の中で見るのではなく、自分の主張に役立ちそうな言葉をピックアップして、自分の思うような結論を導き出し、これまた文脈とは無関係にマルクスの言葉を抜粋して権威付けに利用してきました。

「ある種の先入見」と「直感」との差がどれほどあるのかは不明ですが、レーニンの思考を「ある種の先入見」と誹謗し、レーニンの人格を傷つけた石川先生は、今度は自ら「資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度」を「直感」で導きだしたそうです。

レーニンはマルクス主義者の考察のしかたについて、「マルクス主義の全精神、その全体系は、おのおのの命題を、(α) 歴史的にのみ、(β) 他の諸命題と関連させてのみ、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています」(第35巻『111 イネッサ・アルマンドへ』1916年11月30日に執筆P262~263)と述べており、レーニンの著作はその精神で貫かれています。しかし、観念論者の不破さんたちは、このような視点でレーニンの著作をみることはできません。だから、レーニンの考えをまったく理解することができないのです。

石川先生は「直感」で、資本主義の歴史的発展の度合いをはかる尺度は「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」と言い、この「直感」は「マルクスの資本主義論に近いものとなっている」という。この認識がいかにか的を外れたものであるかは「⑦マルクスの資本主義論とエンゲルスの資本主義論とは違うという」で検証したとおりです。

不破さんの「桎梏」論も仰天だが、「資本主義が発展すると「国民による資本主義の民主的な管理」が進む」という石川先生の進化論も仰天だ。最近、『前衛』や『経済』を読んでいると、真面目に科学的社会主義を勉強してきた者をビックリさせる記事が多い。

このような人たちが「直感」と「民主主義」や「社会権」等のアイデアを持ち合って試論を示し合ったのでは、出てくる「資本主義の発展段階=未来」は、十九世紀末に現れた「アンテグラリスト社会主義者」の考え方も遙かに超えたものになることは、まず間違いないものと確信する。

ケインズが「有効需要」を創ったり、ヘリコプターベンがヘリコプターで金をばらまいたり、資本主義の延命のための方策を「民主的な政府」(金権政治のもとで国民が直接選んだ政府)がおこなうことを「国民による資本主義の民主的な管理」の発展というのなら話は別だが、ブルジョアジーが支配する社会で、「国民による資本主義の民主的な管理」の発展などありえません。

資本主義的生産様式のもとで、資本主義的に歪められた「社会的生産」を維持し、資本主義的に歪められた「社会的生産諸力」を発展させられる限りで、「民主主義」も資本主義的に歪められて発展してきました。これが、資本主義社会の「民主主義」です。

同時に、社会的生産によって成り立っている資本主義は社会的生産と所有の私的資本主

義的性格の矛盾を社会的生産を担う部分(労働者階級)に押しつけることによって、本来の社会の主役である社会的生産を担う労働者階級からその本来の地位を奪うことによって、民主主義を制限します。これが、資本主義社会の「民主主義」です。

だから、社会的生産を担う労働者階級は、前衛党の理論的な援助もうけながら、制限された「民主主義」を突破する要求をもつようになり、自ら主体的に社会と関わり、社会的生産諸力を発展させ自らの生存条件を向上させる「民主主義」の視点を確立していきま。その過程と並行して、現在の資本の行動をリアルにみて、「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」がどのように変化・成長しているのかを正確に分析すること、それこそが、現在の「資本主義の発展段階」をつかむということです。

大切なのは、「民主主義」の視点、「by the people」の視点をもって、いまの日本の姿を曝露して、「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」を明らかにし、たまたかうエネルギーを結集することです。

〈参考〉アンテグラリスト社会主義者とは

「十九世紀末のフランス、ベルギー、イタリアの労働運動内にあった改良主義的・日和見主義的な一流派である。マルクス主義に反対して社会主義は労働者階級ばかりではなく、なやめる全人類に立脚すべきである、と主張した。したがって、科学的社会主義の「狭さ」に反対し、階級闘争に反対し、階級間の平和とブルジョアジーの「りっぱな分子」との協力を説いた。彼らはブルジョアジーにむかって、論理と公正の原理にしたがって行動するよう、そして彼らの個人的利益にしたがって行動しないように呼びかけた。彼らは、経済的要因が決定的要因であることを否認し、すべての社会的要因のアンテグラリテ（全体）を強調したが、このことは道徳的要因を優位におくことを意味した。」(レーニン全集 第14巻 P443~444 事項訳注)

②それでは、これから資本主義はどのように発展するのか

資本主義がこれからどう発展するのか。私たちは歴史の百歩前まで知ることはできるが、未来は一步先くらいまでしか見通すことができません。

資本主義は、資本の集積と集中をつうじて発展する。資本の独占資本への成長は新しい共同社会への物質的準備が整ったことを示しています。日用品の生産の効率化を通じて社会の成長を図ってきた資本主義は、各国で日用品が充足されたとき、その役目を終え、「桎梏」に転化する。そして、1970年代の初め、先進資本主義諸国において日用品は充足され、私的資本主義的生産様式はその役目を終え、国民国家にとって完全に「桎梏」になった。

レーニンが言ったマルクス主義の精神にもとづき、(α) 歴史的に、(β) 諸命題を関連させて、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけて、「現実」に立脚し——現在の世界の政治バランスを前提に、資本主義が存続していくものとして——「近未来像」を考察し、方向性を素描してみましょう。

③世界はどうか

①経済成長は

- ・日用品が未充足の中国を中心とする新興国グループ経済の成長。
- ・これらの国々の日用品が充足された時、資本主義の絶望の時代が始まる。

②金融資本の動向は

- ・マネーの過剰の増大。先物(現在価値)商品による投機(架空取引)の拡大。金融バブルと恐慌の反復。
- ・新興国への投資の拡大。
- ・一部の先進国の資産価値の増大と各国の格差・バラツキの拡大。

③富の分配傾向は

- ・労働需給により、実物経済の成長する国の労働者の賃金上昇と実物経済の停滞する国の労働者の賃金の停滞・低下。
- ・全体としては、資本の側の配分増、格差の拡大。

④労働条件・民主主義の行方は

- ・新興国の基本的改善
- ・先進国の搾取と収奪強化のための「平等」「能力主義」の深化と「社会的生産」の歪みの発展による、社会の崩壊と閉塞状況の深化。

⑤政治の方向は

- ・新興国——相対的安定から激動へ。
- ・先進国——反動化と前衛党不在による極左化。

⑥日本はどうなるのか

〈ケース1〉共産党が現在のまま小ブルジョア政党でとどまる場合と〈ケース2〉共産党がマルクス主義に蘇り、労働者階級の党として都市勤労者層と革新農民層との連携をした場合とでは、歴史の進み方は大きく差が出る。〈ケース1〉の場合、スペイン、ポルトガルのような失業大国になる可能性が極めて高く、〈ケース2〉の場合は生産の社会的性格を発揮できる経済・政治システムへの前進が現実のものとなる。詳しくはHP「[パラダイムシフトとは何か、その結果、どんな社会が現われるのか](#)」を参照して下さい。

私たちが「資本主義の成熟度」——矛盾はどれだけ深まり、物質的準備はどこまで整い、人民の主体性と民主性はどこまで高まり、労働者階級の団結はどこまで実現し、社会主義への距離はどこまで縮まったのか——を考えると、レーニンが『マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語訳序文』に書いた、次の文章をかみしめながら考えることを忘れないようにしましょう。レーニンは言う、「マルクスは、もっとも平和的な、彼自身の表現によれば「牧歌的」におもわれる——また(『ノイエ・ツァイト』の編集者の言葉によれば)「みじめにも鈍感な」時代にも、革命の近いことを感知することができ、プロレタリアートをたかめて彼ら自身の先進的な、革命的な任務を自覚させることができた。マルクスを俗物的に単純化するわがロシアのインテリゲンツィアは、もっとも革命的な時代にも、プロレタリアートに受動性の政策、「流れにしたがって」従順についていく政策をおしえ、流行の自由主義政党のもっとも動揺的な分子を小心翼翼と支持することをおしえているのだ！」(全集 第12巻 P105~106、1907年2月)と。

◎資本主義から社会主義への発展をどのように準備するのか

マルクスの次の文章は有名です。

「労働過程がただ人間と自然とのあいだの単なる過程でしかないかぎりでは、労働過程の単純な諸要素は、労働過程のすべての社会的発展形態につねに共通なものである。しかし、この過程の特定の歴史的な形態は、それぞれ、さらにこの過程の物質的な基礎と社会的な

形態とを發展させる。ある成熟段階に達すれば、一定の歴史的な形態は脱ぎ捨てられて、より高い形態に席を譲る。このような危機の瞬間が到来したということがわかるのは、一方の分配関係、したがってまたそれに対応する生産関係の特定の歴史的な姿と、他方の生産諸力、その諸能因の生産能力および發展とのあいだの矛盾と対立とが、広さと深さとを増したときである。そうなれば、生産の物質的發展と生産の社会的形態とのあいだに衝突が起きるのである。」(『資本論』第3巻 第2分冊大月版⑤ P1128B7-1129B1)

このように、「国民の新しい共同社会」への物質的な準備は「資本主義」がしてくれる。しかし、歴史的使命の終わった社会を新しく作りかえるのは人間だ。先進資本主義諸国は1970年代の初めには黄昏どきをむかえた。日本は1990年代の半ばには産業の空洞化が誰の目にも明らかになり、日本存亡の危機の時代に入った。そのことを正しく認識できる、「革命」を起こすための人間集団がいなければ世の中は変わらない。現在の日本で「生産の物質的發展と生産の社会的形態とのあいだに衝突」がどのように起きているかを見るのが重要である。「直感」で、資本主義の歴史的發展の度合いをはかる尺度は「国民による資本主義の民主的な管理がどこまで達成されているか」などと寝ぼけたことを言っている場合ではない。

そして、レーニンが『ペ・キエフスキー (ユ・ピャタゴフ) への回答』(1916年8月~9月に執筆 全集 第23巻 P16~20)で、次のように述べている。

「一般に資本主義、とくに帝国主義は、民主主義を幻想に変える——だが同時に資本主義は、大衆のなかに民主主義的志向を生みだし、民主主義的制度をつくりだし、民主主義を否定する帝国主義と、民主主義をめざす大衆との敵対を激化させる。資本主義と帝国主義を打倒することは、どのような、どんなに「理想的な」民主主義的改造をもってしても不可能であって、経済的変革によってのみ可能である。しかし、民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない。」

私たちは、「民主主義」を羽織った独裁を見抜き、社会を「民主主義」の空気で満たさなければならない。「by the people」の思想を持った、幾百千万の労働者・国民で満たさなければならない。そのために、革新政党は自由な討論の場の保障を自らの義務とするようなものでなければならず、政党設立の経済的束縛からの解放を自らの責務としなければならない。先進的な人たちは、このような政治環境を整える努力の中で「自我を確立した、主体性を持った人間」を雲霞のごとく輩出させるために曝露し、人民を組織し、彼らに積極的・自覚的に役割をになってもらうよう、努めなければならない。

そうすれば、いまの日本の正しい現状認識も、日本を危機に陥らしている私的資本主義的取得形態をどのように廃止したらよいかも、私的資本主義的取得形態から解放された社会的生産諸力をどのように使って豊かな社会化された生活を実現するのか、等々も彼らの闊達な民主的討議と自覚的で創意に満ちた実践とで真理に近づくことができる。

資本主義から社会主義への發展をどのように準備するのか？

それは、マルクス・エンゲルスが『共産党宣言』で教えているように、労働者階級の団結を組織することだ。労働者階級を「自我を確立した、主体性を持った人間」として、未来の建設者としての自覚を持った階級として結集させるための努力を資本主義の曝露を通じて、資本主義への怒りの組織を通じて、大河のような労働運動の構築を目指して、徹底的に追求することである。その大河の一滴一滴は、「by the people」の思想で武装され

た、「国民の新しい共同社会」をつくる「新しい人」でなければならない。

あえて資本主義の歴史的発展度合いをはかる、最も確かな、尺度をいうとすれば、それは、「国民の新しい共同社会」をつくる「新しい人」がどれだけ増えたかということだろう。

III 絶望的な感想

一昨年(2014年)の12月、『赤旗』に載った『経済』の一月号の特集の宣伝が目をついたので、久しぶりに購入しようと思い、共産党の地区委員会に行ったら、普段は一冊くらいは有るのに今回はたまたま品切れだった。しかたなく、12月の末に、美和書店に行ったら、運悪く、土曜日で休み。満を持して上京し、1月13日(火)にやっと手に入れることができた。

「特集 21世紀の資本主義 限界論と変革の課題 資本主義の発展段階を考える」、本来ならば『経済』が常に中心におくべきテーマだが、今の共産党と労働運動に欠けているテーマだ。そして、石川先生は不破さんとの鼎談で、不破さんの「桎梏」に関する教義に異を唱えた、大変貴重な学者だと思っていたので、——日本「資本主義の発展段階を」、日本国そのものの存亡の危機をもたらす「産業の空洞化」と労働者・国民との矛盾の中で捉え、資本による私的資本主義的取得形態こそが、日本社会を崩壊させ、社会化された労働と社会化された生産の「桎梏」になるということまでは思考が及ばないまでも——どのように「桎梏」を捉え、それとの関連でどのように今の日本「資本主義の発展段階を」とらえているのか、興味と期待を持って本書を購入した。

しかし、残念ながら、石川先生の「資本主義の発展段階を考える」とは、現在の日本資本主義の発展段階を、資本蓄積がどのように行われ、それが国民生活にどのような影響をおよぼしており、その中でどのように「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」が成長しているのかを分析し、社会変革の課題を考えるものではなかった。「社会発展の度合いをはかる基準」なる超歴史的な「概念」を考えだし、「資本主義の発展・成熟をとらえる基準」として、「国民による資本主義の民主的な管理」の達成度合いなるものを「直感」したと言う、不破哲三氏の「ルールある資本主義」論の延長線上に未来社会があるという不破氏の「桎梏」論と同一のものだった。私的資本主義的生産様式の社会で、「国民による資本主義の民主的な管理」が達成されるというのも「矛盾」に満ちているが、いまの日本が抱えている深刻な経済的な矛盾を抜きに、そのもとでの「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」を抜きに、それらと隔絶したところで、「資本主義の発展・成熟をとらえる基準」という現実世界から遊離した実態のない「概念」を「直感」するというのは、あまりにも非科学的ではないかと思う。資本の運動との関連の中で資本主義の発展を見るのではなく、「社会発展の度合いをはかる基準」という「歴史性をもった社会」から独立(超越)した非歴史的な「或るモノ」を探しだして、その「或るモノ」がどれだけ「イデア」に近づいたかを考える。私たちは、こういう思考をする人を観念論者と呼んでいる。

まだ若い石川先生には、現実を直視し、不破さんが歪曲した科学的社会主義の理論を克服して、正しい「マルクスのかじり方」をしていただくようになることを、願ってやまない。

最後に、私たちが学ぶ上で大切な、エンゲルスとマルクスが私たちに残してくれた二つの文章を抜粋してみました。私たちはこれらのことばを忘れないようにしたい。

・ **どこでもいつでも政治的な状態や事件はそれに対応する経済状態によって説明される**
「マルクスによって 1845 年になされた」「どこでもいつでも政治的な状態や事件はそれに対応する経済状態によって説明されるという発見。」（これは、ローリア氏が 1886 年に「マルクスの歴史理論(=唯物史観)を、彼自身の発明として」述べていることへのエンゲルスの反論の一節) (『資本論』第 3 巻 第 1 分冊 大月版 ④ P23-24 序文)

・ **マルクスの研究にとっての導きの糸として役だった一般的結論**

「私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、その仕事の序説は、1844 年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究の到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解できるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、18 世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。この経済学の研究を私はパリで始めたのであるが、ギゾー氏の追放命令でブリュッセルに移り、そこでさらに研究をつづけた。私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる。人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係を取り結ぶ。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法的かつ政治的な上部構造がそびえたち、そしてこの土台に一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法的表現にすぎないが、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときから社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、徐々にであれ急激にであれ変革される。このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における、自然科学的に正確に確認できる物質的な変革と、人間がそのなかでこの衝突を意識し、それをたたかいぬくところの法的な、政治的な、宗教的な、芸術的な、あるいは哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー的な諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかは、その個人が自分自身のことをどう思っているかによって判断されないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなけ

ればならない。一つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて発展しきるまでは、決して没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、決して古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。というのは、詳しく考察してみると課題そのものが、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生成の過程にある場合にかぎって発生する、ということが、つねにわかるであろうから。大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式を、経済的社会構成が進歩していく諸時期としてあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがって、この社会構成をもって人間社会の前史は終わるのである。」

(レキシコン②-[1]、『経済学批判』(序言) 全集、13巻、P6-7)